ある宗族の形成：族譜編纂の虚構と事実

荒武　達朗

ARATAKE Tatsuro

徳島大学総合科学部　人間社会文化研究　第31巻

2023年

徳島大学総合科学部　人間社会文化研究
第31巻（2023）67-102

ある宗族の形成：族譜編纂の虚構と事実

Formation of One Chinese Lineage: Fiction and Facts in the Editing Genealogies

荒武　達朗

Ⅰ　はじめに

中国社会において宗族などの血縁組織が重要な機能を果たしていることは論を俟たない。個別家族は日常生活と生産・消費の単位である。その個別家族は血縁、地縁などのつながりで様々な集団を形成するが、その中でも同姓という関係で結合したまとまりを「氏族」や「族姓」と呼ぶ。この同姓の族姓の内、共通の祖先を抱いた構成員相互の系譜関係を明確化して形成された集団、その表象として族譜、族田、祠堂を具えた男系の血縁組織のことを「宗族」と呼称している。この宗族は近世以降の地域社会では文化的な価値意識を体現し、組織としても様々な社会的な機能を果たすことがあった。それ故に過去、歴史学・社会学の領域においても膨大な研究が宗族を考察の対象として取り扱ってきた。テーマの一つとして地域社会における近世宗族の形成時期に関する議論があるが、先行研究は明代中期以降に宗族結成の潮流が生み出されたとしている(1)。ただし地域的偏差が大きく、華中・華南は早く華北はそれに遅れるということも明らかになっている。

その具体像を解明するためには、当然個々の宗族の事例に基づく分析が有効な手段となるだろう。しかしながら明清時代を通じてどの地域社会でもいわゆる「豪門」「巨室」「望族」などと称される政治的・経済的実力を具えた一族が存在している。人びとはしばしば自らの安定と発展の為、あるいは単に地域社会内での声望を獲得する為に、血縁組織の凝集力を高めていく。やがてそれはある程度の格式を具えた“組織としての”宗族へと結集することがある。ただ中国の社会的流動性は高く集積された財富の分散、巨大な血縁組織解体への圧力は常に存在している。一時の権貴の家も数世代後には消滅していることも稀ではない。ある時点で一つの宗族らしき集団が出現したとしても、それは特異なものであるかもしれない。その事例をもってその地域社会の宗族形成の動向を代表する指標と見なすことはできないだろう。そこでまず地域社会の宗族の群体、その全体像と形成発展の経緯を概観した上で、個々の宗族をその中に位置づけていく作業が求められるのである。だが華北の地域社会では宗族の分布、規模共に希薄であり、族譜などの史料の量と質が華中・華南に比して劣っている。そもそも華北の地域社会に宗族が存在しているのかどうか、という前提すらも確認することが難しい。

地域社会における宗族の群体の性格並びにその形成の過程を解明する上で地方志の“氏族表”という記事は重要な手がかりを提供してくれる。陳其南氏はすでに 1985 年発表の論考で地方

志の氏族志に注目し、それが持つ史料的価値を指摘している[(2)]。地方志の氏族志はその地域に居住する族姓（氏族）の概況を整理し叙述している。一般的な氏族志は地域社会の名族・望族を幾つか取り上げて紹介するにとどまるが、またある種の氏族志は地域社会に居住する大小様々な族姓を対象とした悉皆調査に基づいて執筆された。この後者が筆者が“氏族表”と呼ぶ資料であり、ある地域社会の宗族の群体を考察する上で高い価値を具えている。

筆者が考察の舞台とする山東省には管見の限り二つの地方志に悉皆調査型の氏族表が収録されている[(3)]。一つは山東省中部、青州府所属の濰県の『民国濰県志稿』「氏族」である。調査対象の族姓は 668 箇と多数に及ぶ。その内容は各族姓の地域社会における実態にほとんど言及していないが、当地への来住する前の先住地、原籍地に関する記述が充実している。それ故に明朝初期の移民政策あるいは洪洞伝説・棗強伝説など移住伝説を研究する上での重要な史料として扱われてきた[(4)]。もう一つは現在の莒県及び莒南県を中心とする莒県（本稿では莒州と表記を統一[(5)]）の廬少泉修・荘陔蘭纂『重修莒志』巻 40・41「民社志・氏族」である（以下、この地方志は『重修莒志』と略記する）[(6)]。これは 1930 年代の莒州に居住していた 196 の有名族姓を調査したものである。名のある氏族とはいえ中にはわずか 1 行程度の記述しかないものもある。かつては相当の勢力を誇ったものの、調査時点で零落し目に見えるような宗族組織を形成していない族姓も含まれていると考えられる。その調査項目は居住地（城居、鎮居、郷居）、来住時期、原籍地、先住地、在莒世代数、分支数、分支世代、失考世代（これより前は記録のない世代）、族譜・祠堂・族産の有無など多岐に及ぶ。濰県の氏族表が簡潔であるのに対して、当地のそれは極めて詳細で分量も多く、これに拠ればある地域社会に生きる宗族の群体を俯瞰することが可能となる。

この氏族表に基づき筆者は前稿において明代中期以降、清代中期に至る莒州地域社会の宗族の群体の概要を整理した[(7)]。本稿はこの群体の中からある一つの宗族をその典型例として取り上げ、彼らが同時期においてどのように出現し成長してきたのかを叙述する。先ず第Ⅱ節では前稿の知見で得た莒州地域社会における宗族の群体の概況を改めて整理する。続いて第Ⅲ節でその宗族の群体の中で典型例と思われる大店荘氏という宗族を取り上げ、彼らが自認する公式の歴史記憶を検討する。最後に第Ⅳ節でその宗族の“物語”をより客観性の高い史料の記事に基づいて再検証する。ある宗族の履歴を考察するに際しては当然彼らの族譜に拠るべきであるが、そこには相当量の誇張、修辞、虚構が含まれている。また意図的に記憶を改竄し事実を削除するケースもあり注意が必要となる。故にその点を念頭に置いて彼らの物語を各種の史料と対照させながら事実関係を読み解いていかねばならない。以上の作業を通じて莒州地域社会における宗族形成の歴史がより具体的に解明されるだろう。

Ⅱ　清代莒州地域社会における宗族の群体

まず本節では前提としてこれまで得られた知見を簡単に整理しておきたい。1936 年刊行『重修莒志』巻 40・41「民社志・氏族」（すなわち前稿で紹介した氏族表）の記事を整理すると、

莒州に居住する 196 の族姓の内、約 80%が郷村地帯、残り約 20%が莒州城（1930 年代時点では莒県城）と市鎮に居住していた。一般的に族譜・祠堂・族田の有無は宗族結成を表す標識と考えられている。族譜編纂に関する記事を掲載する族姓は 14%にとどまるが、この数字は恐らくは過少であり、抄譜や草譜の類を含まない、或いは族譜編纂は当然のこととして記事として収録しなかった可能性がある。族田を設置している族姓は全体の 20%前後で、州城、市鎮、郷村の間で大きな差異は見られない。祠堂を保有する族姓は全体の 32%を占めるが、州城と市鎮では約 50%、郷村居住の場合は 29%という傾向が現れている。城鎮では宗族の形態を呈する族姓の割合がやや高いと言える。莒州（莒県）の隣県の地方志『臨沂県志』（1917 年）によれば「土俗では宗祠は少なく、歳時には墓や寝室で祭祀を行う」とあり[8]、祠堂の類いは少なく「墓」「寝室」で祖先祭祀を行うことが一般的であったようだ。ここからも山東省南東部の血縁組織は宗族を形成していたとしてもその規模は小さかったと考えられよう。事実、筆者が別稿で明らかにしたように、当地は一部に大地主が存在していても、基本的には自作農を中心とする小家族が多数を占めていた。中国共産党の土地改革で打倒された封建地主とされる家族も、その多くが中農程度の資産しか持っていなかった[9]。

われわれは莒州にいつ、どこから来たのか――当地への遷居に関して人びとの間ではある一つの意識が広く共有されていた。いわゆる移住伝説である。華北全体をみると山西省洪洞県を原籍と自認する「洪洞伝説」が広範囲に分布していることが知られている。また河北省の棗強県より来住したとする「棗強伝説」も「洪洞伝説」の次に多い[10]。先に見た濰県の氏族表によれば濰県では全体の約 5 分の 1 の族姓が明初の洪武・永楽年間に洪洞県から移り住んだという記憶を伝承していた。この洪洞、棗強を出自とする伝説は莒州でも若干の事例が確認されるが、山東省東南部の沂州府から江蘇省東北部にかけての一帯ではこれとは全く異なる種類の移住伝説が共有されている。莒州 196 の族姓の内、69 姓（全体の 35%）が明朝初期に江蘇省東北の東海（海東、海州）から当地へ来住したと自認しており、さらに中でも東海大村（東海十八村、等）、或いは東海当路村（当蘆村 党瑯村 盪櫓村）という具体的な地名を挙げるものがそれぞれ 14 例、12 例確認できる。このような江蘇省東北部の東海（行政区分としては海州、現在の連雲港市）を自らの来歴に加える移住伝説を「東海伝説」と称する。また移住伝説はそれぞれが無関係に存在しているわけではなく、相互に干渉、影響している。例えばある族姓は洪洞伝説と東海伝説の両方を採り入れた新しい移住の物語を作り上げた。同じ移住伝説の共有は共通するアイデンティティを形成し、社会的ネットワークの拡大に寄与する。そうであるならば複数の移住伝説が渾然一体となることに不都合はあるまい。このような“偽りの故郷”の設定は広く見られるものであった[11]。

この「東海伝説」に基づき曹樹基氏は洪武・永楽期に江蘇省北部沿海から山東省南東部方面に向かう移民の流れがあったと推定した[12]。ただ『明実録』を始めとするより確かな史料には関連する記事を見出すことができない。また常建華氏は清初康熙年間の遷海令（康熙 23 年・1683 年解除）に伴う沿海部から内陸への徙民という事実を明初に読み替えたのではないかという説を提示している[13]。この説は魅力的であるが伝説がどのような史実を反映したものか否か

という点は実証し難いだろう。

前稿での議論を補足するならば、当地の人びとの間で東海伝説が広く受容されるようになったのは、「東海」にある文化的表象が附随していることと関係している。例えば東海十八村については次のような言説が付与されている。

> 東海の山中は泉と林があり、穀物は稲を植えるのがよく、食糧は外地に求めることはない。民には老いて死ぬまで府城に行ったことがない者がおり、また家の門をたたく吏もおらず、この上ない楽土である。いわゆる東海十八村、村々に賢人が出るということである。(14)

この「東海十八村、村々に賢人が出る」というフレーズは明清時代の当地の文献によく出現し、桃源郷に類する理想郷の一つとして描くことが多い。東海当路村についても漢の鄒衍にまつわる由来が残されており、現在の連雲港市内、海上雲台山の近くにその地名を確認できる(15)。王憲民氏は移住伝説の基底に元末明初の江蘇省北部沿海への難民流入という事態があったと推定している。加えてこの地域の雲台山が古来名勝地として知られ東海十八村に関する文章や画像資料が各種文献に豊富に掲載されていることに着目し、これらが文化的象徴、当地住民の心の中の理想郷となっていると指摘した(16)。なぜこの地が遙か遠い祖先が住んでいた故郷と目されたのか。筆者はこの王憲民氏の見解には一定の蓋然性があると考える。

ではこの元末明初の移住伝説が相当部分虚構を含むものであったとして、それぞれの族姓の記憶はどこまで遡ることができるのか。具体的な来住時期を記載している族姓の中では、14 世紀後半の明初 28 例（全体の約 14%）と洪武年間 48 例（約 24%）の合計 76 例（約 39%）が多数を占めていた。また「今伝至〇〇世」というように始遷祖から調査時点の 1930 年代に至る“世代深度”を記載している族姓に注目すれば、17 世代～20 世代を経ているものが半数（90 例、約 53%）を数える。これを 1 世代 30 年として計算すれば大体元末明初から明代前期にかけての時期に相当し、具体的な来住時期の伝承と居住世代数が一致する。一部の族姓（8 例、4%）は軍戸の後裔を自認しているので明初にこの地に配置されたものが確かに一部には存在していたと考えられる。

しかし多くの族姓の場合、明初の移住伝説については饒舌であるにもかかわらず、明初から明代中期にかけての期間については寡黙である。それを端的に示すものがある世代以前を「失考」（17 例、9%）とするケースである。明初に移民の由来があるとしても、ある世代以前の記録は消滅した、族譜が明末の戦乱で焼失した（「族譜毀於明末兵燹」）ことにより確たることは言えないというロジックはよく見られる。この明初から明代中期にかけての記述の空白は、人びとが来住の経緯――おそらくは明初より後のこと――に色々とアレンジを加え元末明初へとその物語を“蹴り上げた”可能性もあるだろう。虚構か事実かは措くとしても、ここに明初の東海移民という共通のアイデンティティが出現したことは確かである。本稿で考察する大店荘氏もまたその伝説を共有する族姓の一つであった。

『重修莒志』氏族表には明代中期以降になると散発的であるがより具体的な記述が出現する。

族譜編纂、祠堂建設、族田設置に言及する記事が少数ながら現れるので、この時期に莒州地域社会における血縁集団の結集が進行し、宗族組織の萌芽が現れたと推定できる。だが明末清初は全体的に低調で宗族の事業に関わる記事はほとんど見出せない。続いて 18 世紀初の康熙年間半ば以降、とりわけ乾隆年間・嘉慶年間には族譜、祠堂、族田設置の記事が数多く見られるので、この時期に宗族の形成が広範に進行したと考えられる。

朱亜非氏は明清時代の山東省で 3 代以上続けて挙人・進士合格者を出した家族、五品以上の中高級官員が族人にいる家族、百年以上にわたって繁栄が持続したと確認できる家族を抽出し州県ごとに整理した(17)。一般に科挙受験は相当の財力を具えなければ受験し合格者を輩出することはできないので、この条件は大規模な宗族組織が形成されていた指標となる。その分布は登州府、莱州府、青州府の東三府が州県当たり 3-4 家族と最も稠密であり、次いで魯西北の平原地帯では各州県 2-3 家族とやや数を減らしている。これらは山東省の北半分を占めている。これに対して山東省南部では上記の条件に合致する家族は州県あたり多くとも 1 例を超えない。つまり山東省北部の魯西北平原と山東半島では宗族の群体が比較的発展しその中から大宗族が出現しているが、南部各州県の宗族の形成と成長という点でやや落後した位置にある。

加えて山東省南部の中でも西部の兗州府、曹州府、済寧直隷州は大運河が縦貫していることから清代中期以前は比較的富裕な地域であった。だが河運が海運へと転換し、運河の淤塞が進行、さらに 19 世紀半ばに黄河が流向を東北へと変えたことで魯西南地区の経済は沈滞へと向かった。一方、東部の沂州府は沿海航路の発展により一定の経済的成長を見ることができるものの、内陸に入ると全体的に丘陵地帯が基調であり特筆すべき産業もない取り残された地域であった。宗族の形成と発展を促す富の集中という点で当地は不利な立場に置かれていたと言える。だが少なくとも莒州でも華北の諸地域と歩調を合わせるように明代中期に宗族形成の萌芽が見られ清代前期以降に群体としての発展が見られたことが明らかとなった。ただし地域社会全体で宗族が遍く叢生していたのではない。1930 年代の莒州では個別家族を基調としており、宗族は小規模且つ散漫な組織であったと考えられる。宗族の群体もそのような小宗族が中心であり、一部には以下で検討する大店荘氏のような大宗族が点在していた。

Ⅲ　大店荘氏の履歴：彼らの“物語”

本稿第Ⅲ節と第Ⅳ節では莒州宗族の群体の中から一つの典型例を抽出し、地域社会における宗族の形成過程をより具体的に解明していくこととする。ここで取り上げるのが莒州の南部、大店鎮に居住する大店（朱陳店）荘氏という宗族である。大店鎮は民国初年以前は“朱陳店”“朱陳村”と称した。清末以前は朱陳店荘氏と称する方がより正確であるが、本稿では大店荘氏と呼称を統一する。この家族の起家から地域の望族へと上り詰めていく過程は、先に検討した莒州宗族の群体の成長とほぼ同期しているように見えるので、彼らを莒州宗族の典型的成功例とすることは妥当であろう。

大店荘氏の成長の過程については様々な文献に触れられているが、すべての言説の大本を探

れば彼ら自身の族譜、並びに荘氏族人も編集に参画している民国期の地方志『重修莒志』（1936年刊、総纂は荘陔蘭）へとたどり着く。前者の族譜については後述するとして、後者の地方志の氏族表「八区大店鎮荘氏」の項目が総説として重要である。氏族表が莒州地域社会に向けた各族姓のカタログであるとするならば、ここに収録される記事は彼らの“プロフィール”である。荘氏の族人が地方志の採訪・編集に携わっている以上、ここに書かれた内容は荘氏が対外的に発信したい自己像をそのまま反映しているはずである。荘氏の欄には彼らの履歴、居住地、分支、世系、祠堂の坐落、家訓など約700字に及ぶ説明がなされ、この分量は氏族表の中でも最も長い部類に入る。その履歴部分に相当するところに彼らの来歴が要領よくまとめられている。

> 荘氏は熊繹より出て楚王侶、諡は荘に至って後にこれを氏とした。大店西門の中に昔興福寺があり、その牆に金大定4年（1164年）の度僧牒の刻石が嵌まっていた。碑の裏側に施主の姓名が書かれており、古（故）郡村の項に荘□、荘洪とあった。つまり荘氏の莒南県での居住は金朝より前の事である。しかし荘氏の族譜には原籍は江南東海十八村、明洪武初年に莒州の朱陳店（大店）に来住したと伝え継いでいる。これを証明するに正徳6年（1511年）の興福禅院の鐘に名前を3世代連ねているが、その始祖として奉る荘瑜は序列が第2代の2番目に位置しているので、それより前に数世代あると知れる。ただ古い族譜は明末の兵乱で焼亡し考証することができない。本県（莒州）、県外の荘氏で系譜を共有していない者はまた敢えて妄りに序列に加えていない。故に族譜は朱陳店荘氏族譜と称する。始祖は瑜、二世で五支に分かれる。長支、海の後は…（省略）…に居住。二支、漣の後は…（省略）…に居住。四支、秀の後は…（省略）…に居住。五支、伸の後は…（省略）…に居住。三支、浩は失考した。今に至るまで19世代、始祖の塋祠は大店鎮、祭田6畝は大店西湖大橋にある。[18]

この冒頭の金朝大定4年（1164年）の時点で荘氏が当地に居住していたかどうか、その系譜が現在の荘氏につながるかどうかは不明であり考証することもできない。続いて述べられるように荘氏の伝承では彼らの原籍地は江南の東海十八村（或いは海東十八村）、明朝の洪武年間に莒州へと来住したとされるので、これらは時期的に矛盾している。また荘氏は明初の東海移民の後裔と自称するが、始遷祖の氏名は不明であり何世代か後の荘瑜を始祖と定めている。明初から荘瑜に至る間の記録がない理由を荘氏は「明末の戦乱によって族譜が焼失した」と説明している。だがある時（後述するように乾隆初年）に興福禅寺より重さ千斤の鉄鐘が発掘された。それは明代の正徳6年（1511年）の鋳造で施主の名に荘瑜の名前が挙げられており、その上にさらに1世代分の名前が記されていたとされる。この鉄鐘の発見が何を示唆しているかも合わせて、荘氏の出自をめぐる問題は次節で再論する。

以上が地方志に描かれた莒州地域社会における荘氏のプロフィールである。続いて族譜に基づいて荘氏自身の公認の歴史を概観する。まず彼らのこれまでの族譜編纂の状況を簡単に整理する。

荘氏の修譜は現在 8 回を数える。伝承では明代にも族譜を編んでいたが明末の兵乱で焼亡してしまい、清代に入ってから族譜編集を再開したという。清代前期の段階で始祖荘瑜の子供 5 人が形成する分支の内、三支世系は「失考」、五支世系も「流離失所」でほとんど族人が存在しない[19]。第 1 次修譜は順治 18 年（1661 年）、第 2 次修譜は康熙 47 年（1708 年）に行われた。編集の中心人物はそれぞれ第 6 世荘士行と第 7 世荘捷、ともに長支世系の族人である。第 3 次修譜は乾隆 11 年（1746 年）、二支世系第 8 世荘沛思が発起人となって実施された。その際、地方志にも掲載された四支世系の第 9 世荘保泰の発見した興福禅寺の鉄鐘の情報も採り入れられたと考えられる（後述）。第 4 次修譜は乾隆 43 年（1778 年）に第 9 世荘位中、第 5 次修譜は嘉慶 8 年（1803 年）に第 10 世荘詠、第 6 次修譜は道光 13 年（1833 年）に第 11 世荘瑤によってそれぞれ完成した。第 4 次以降現在に至るまですべて四支世系の族人が首唱し刊行された。第 6 修までは大体 30 年から 40 年の間隔で編纂が繰り返されてきたが、第 7 次修譜事業は第 12 世荘彦敏によって宣統元年（1909 年）完成、翌宣統 2 年（1910 年）刊行というように第 6 修より約 70 年を隔てて挙行された。これは 19 世紀後半の捻軍の襲来により地域社会が大きく混乱したことによる。

日中戦争と国共内戦の波及は当地にも大きな被害をもたらした。また中華人民共和国の統治下では宗族などの活動もまた公然と行うことはできなかった。1980 年代より政策が緩和されたことで息を潜めていた各種の伝統的組織が再び表に出てくることとなる。第 8 次修譜は 1988 年から準備が進められ、2002 年に刊行、さらに 2010 年には補正巻が出版された。本稿では『荘氏族譜』（宣統 2 年、1910 年刊行の第 7 修族譜）を主史料とするが、この第 8 修族譜を用いる場合は『魯莒大店荘氏族譜』と明記する[20]。現在の莒南県では抗日根拠地の各遺跡とともに“荘氏荘園”が重要な観光資源として対外的に宣伝されている。かつての大店荘氏の居住地は革命後取り壊され中学校となっていたが、21 世紀に入り再開発を経てテーマパークとして甦った。紅色旅游と伝統文化が矛盾なく採り入れられているところが、近年の中国の世相を反映していると言えるだろう。それ故に大店荘氏については観光案内から学術書まで数多くの文章が著されており、加えて大店荘氏関係者により「山東大店荘氏文化網」という専門のウェブサイトまで開設されている[21]。

大店荘氏の歴史については様々な媒体で語られているが、その内容は第 8 修の族譜に掲載された文章と大同小異である。そこで以下、第 8 修族譜『魯莒大店荘氏族譜』補正巻、2010 年所収の荘維林、荘宿庭「大店荘氏今昔」に依拠して彼らの来歴を整理することとする[22]。便宜上内容に従い幾つかのパートに分割して叙述を進める。

一、家族源流　……現在の大店荘氏は、宣統 2 年（1910 年）刊行の『荘氏族譜』の記載に拠れば、原籍は江南東海郡海東村（また海東十八村と称し、場所は今の連雲港市雲台山北麓）であり、明洪武初年に莒州の朱陳店に来た。明代の族譜は兵火に焼かれてしまった。清代最初の修譜は、時は順治辛丑の年（1661 年）であり、墓碑の記すところ、墳墓の考証に基づいて荘瑜を始遷祖とした。乾隆丙辰の年（乾隆元年、1736 年）荘保泰が大店興福禅寺で千斤の

鉄鐘を発見し、土を洗い流すと、鐘が明正徳 6 年（1511 年）に鋳造され、記載される施主がみな荘氏であることが分かった。……[23]

二、科挙仕進　……　大店荘氏の先祖は明初（大体 1368-1398 年）の江南地方の貧窮農民であり、わずかな家財を担いで大店に居を定めた。100 年余りの労働と節約、苦しい生活の日々を経て、正徳 6 年（1511 年）には衣食に余裕も生まれ、千斤の鉄鐘を寺院に奉納し子弟に学問をさせる経済条件を備えるようになった。[24]

後者の「わずかな家財を担いで」というのは後世の想像であろうが、この荘氏の来住と鉄鐘発見の経緯を記す部分は先に見た『重修莒志』より詳細である。荘氏の原籍は東海郡海東村、別称海東十八村にあるとされる。海東十八村は地方志では東海十八村と記されるが、一般的には後者の呼称の方が多い。明初に朱陳店（大店鎮の古称）に移住、ただしその後の系譜はすべて焼亡し、明中期の荘瑜が始祖とされる。ところが乾隆元年（1936 年）に興福禅寺で鉄鐘が発見された。この銘文により荘瑜より前に少なくとも 1 世代あることが分かったという。

第 5 世の荘謙は明万暦壬子科（万暦 40 年、1612 年）挙人、己未科（万暦 47 年、1619 年）進士に合格、汝寧府推官、浙江道監察御史、陝西巡按御史の職を授けられた。父親の荘希孟は文林郎、監察御史に勅封され、すぐ下の弟の荘升は歳貢の資格を得、その下の弟の荘賁は廩生、従弟の荘鼎は廩膳生、荘鼐（字調之）は武庠生となり洛口守備に、荘整は遼東守備に任ぜられ、叔父の荘希禹と庄希呂は威遠将軍に誥封され、大店荘氏は仕宦家族となった。[25]

荘氏はおそらく明代中期より科挙受験を可能とする家産の蓄積を始めていたと考えられる。その時期は前節で検討した莒州地域社会における宗族の萌芽期とほぼ一致している。その中で発展が著しいのは四支世系であり、その第 5 世の荘謙が万暦年間の挙人、進士に合格した。父の第 4 世荘希孟をはじめ族人たちもその恩典に預かっている。だが彼らの成長と発展は明末清初に停滞期を迎えた。その原因を造成したのが荘謙の従兄弟にあたる荘鼐（そうだい　字は調之）である。

清軍の入関後、荘調之は故郷で義軍を組織し清朝に抵抗、それが失敗して後に北京へ潜入し摂政王ドルゴンを暗殺しようとしたが、成功することなく、行方をくらました。清の順治 18 年（1661 年）荘永齢が進士に合格し、兵部主事を授かったが、壮年にして早逝した。この後、80 余年の間、族人からは科挙合格者は出なかったが、家塾は増加し学問の研鑽は止むことは無かった。科挙受験の必要に応えるため、乾隆 6 年（1741 年）幾つかの家が出資し大店の東北、潯河南岸の林後村に私学を創立した。当初は「林後大学」、後に「因園」と称し、博学の学者を招いては四書五経を教授させた。[26]

明末清初期に第 5 世の荘鼐は反清活動に参加、さらには摂政王ドルゴンの暗殺を企てたという。この事件は荘氏族人の栄達の途に少なからぬ影響を与え、乾隆年間まで科挙合格者を出すことはできなかったとされる[27]。無論、このドルゴンの暗殺未遂は荒唐無稽であり、事実ではない。荘謙の甥である第 6 世の荘永齢が順治 18 年（1661 年）に進士に合格していることからも、荘鼐の反清活動が直接的に荘氏全体の運命を決定づけたとするのは整合性がとれない。この点は次節で再論することとする。ただ事実としては荘永齢から第 10 世の荘闇（1760 年挙人）までの 4 世代、約 100 年間、荘氏からは科挙合格者が生まれなかった。この間は荘氏の停滞時期と考えることができるが、この間においても上昇の試みは続けられ、乾隆 6 年（1741 年）に族人教育のための家塾が開設された。この風潮を受けて乾隆 25 年（1760 年）に荘闇が挙人に合格、荘氏は再度発展期へと入るのである。

> 乾隆庚辰科（乾隆 25 年、1760 年）荘闇が挙人に合格し、貴州知県に選抜された。嘉慶 4 年（1799 年）荘詠が進士に合格し相次いで知県、知府を授けられた。さらに荘許らが挙人に合格し、知県、知州、教諭、訓導などに任ぜられ、大店荘氏は政治的に復興を開始した。この後、学問の気風は更に盛んになった。嘉慶丁丑科（嘉慶 22 年、1817 年）荘瑤が進士に合格し、官位は河南河北彰懐衛道に至った。咸豊丙辰科（咸豊 6 年、1856 年）荘瑤の長子荘錫級が進士に合格、大同知府に赴任した。同治壬戌科（同治元年、1862 年）荘予楨が進士に合格、湖南宝慶府知府に任ぜられた。光緒戊戌科（光緒 24 年、1898 年）荘清吉が進士に合格し、翰林院庶吉士になった。光緒甲辰科（1904 年）に荘陔蘭が進士に合格し、翰林院編修を授けられた。[28]

乾隆 25 年（1760 年）の荘闇の挙人合格以降、清末の荘陔蘭に至るまで複数の族人が科挙に合格するようになった。これは彼らが莒州地域社会第一の望族に上昇する過程をそのまま反映している。明末の荘謙以来、大店荘氏は進士 8 人（その内翰林 2 人）、挙人 22 人（内、進士の 8 名を含む）、抜貢 20 人、歳貢、副貢、恩貢、優貢 34 人、さらに廩生、監生、附生、増生、庠生、郡邑庠生合計 199 人を輩出している。挙人、進士は乾隆年間以降に集中しており、さらに清末以降には国外留学生 8 人、大学・専門学校生 21 名が誕生した[29]。

以上が荘氏の履歴の概要である。ここで彼らの成長過程は、大きく 3 つの時期に区切ることができるだろう。すなわち①起家時期、②停滞時期、③発展時期である。

①の起家時期は明末第 5 世の荘謙が科挙に合格するまでの荘氏宗族の萌芽成長期である。彼ら自身が「明末の兵乱で族譜が焼失した」と叙述している以上、この時期の荘氏の実態を明らかにすることは困難だが、科挙受験に伴う財政的な負担を可能とする家産が形成されていたと考えるのが妥当だろう。先に述べたように金朝時期の荘氏の居住と明初東海移民との矛盾、乾隆年間における明代正徳年間の鉄鐘の発見については次節で検証を加えることとする。

②の停滞時期は第 5 世の荘謙、第 6 世の荘永齢の進士合格の後、第 10 世荘闇の挙人合格（乾隆 25 年、1760 年）に至る約 100 年間である。彼らの記憶では明末清初の荘鼐（荘調之）の活

動がその停滞の一因であるとされているが、彼のドルゴン暗殺未遂という物語は清朝統治下の時期に発行された族譜（第 7 修以前）に掲載できる事柄ではない。ではこの物語は何を原本として、どのように出現したのだろうか。この点も次節で検討する。

③の発展時期は第 10 世荘閏以降、荘氏が民国期の地域エリートへと上昇していく過程である。すでに②の時期の末期、乾隆年間初期に家塾を設置するなど科挙受験を念頭に置いた発展戦略を立てており、この後は合格者を代々輩出するようになった。19 世紀半ばの地域社会の動揺を経て荘氏は莒州の中でも第一の望族へと上昇していくことに成功する(30)。それを象徴するものとして地方志の編纂に携わった人物を見れば、万暦志、順治志、康熙志、乾隆志の編修は王、戦、陳、張、任、何、劉、薛、賀、馬、荊、盛、徐、宋の各姓を冠しており、荘氏の名はまだここに現れていない(31)。嘉慶年間に編纂された莒州の地方志編纂の採訪 29 名中 6 名、監刻 67 名中 1 名がそれぞれ荘氏族人であった。荘氏はまだ中心的な役職を占めていない。民国志には総纂荘陔蘭を筆頭に発起 11 名中 1 名、筹備 13 名中 2 名、分纂 4 名中 1 名、採訪 22 名中 4 名というように多くの族人が名を連ねており、編纂事業の中核を担っていた。地方志編纂はその地域社会の一大事業であることからも、彼らが民国期の莒州（莒県）の地方政治においても重要な役割を果たすようになったと考えられる。

このように民国期以前の荘氏は途中で停滞期を迎えたが、地域社会で概ね順調に発展してきた宗族の成功例と見てよい。前掲の荘維林・荘宿庭「大店荘氏今昔」は大店荘氏が明清民国期を通して成長し地域の名望を獲得した理由を「勤労節倹」「崇文重教」「孝悌仁愛」「清正為官」「維護郷里」「著書立説」「書画芸術」「文物収蔵」という方面での傑出した努力と貢献に求めている。ここからは族人間の親睦の実現、族人の結集の飽くなき追求という宗族形成の理想的な姿を窺い見ることができる。だが多くの宗族がそうであるように、人びとが語り継ぐ伝承からは彼らが外に見せたい理想的な姿しか浮かび上がってこない。地域社会におけるある宗族の実態を知るためには、彼らの物語に含まれる虚構と事実を弁別していく必要がある。以下、節を改めて族譜の記述とその他の史料とを対照させつつ大店荘氏の成長過程の実像に接近していくこととする。

Ⅳ　族譜に見える虚構と事実

ある程度の格式が整い分量を擁する族譜を繙くならば、現世代まで綿々と数十世代が連なる系譜を整序し、その始祖を伝説・歴史上の著名人に設定している宗族は決して稀ではない。その系図には信憑性が乏しいが、このような祖先の偽装はある種の“出自自慢”と宗族の“権威付け”を目指したものだろう。加えて現世的な効果として共通の祖先を抱くことが彼らの社会的結合の拡大に寄与するという側面もある。より近い過去においても、長期間“失考”していた分支の後裔がある時に突然発見され、相互の調査と確認を経て族譜に加えられることもある。さらには従来全く関係が無かった同姓がある時点を以て「実は同族であった」と確認、新たな宗族を形成する事例も数多い。それが本当に事実であるかは重要ではなく、双方が納得、承認

することで新しい社会関係を構築するという意味があった。極端な場合では異なる族姓の間でも疑似宗族が生まれることがある。莒州地域社会でも少なくとも 3 例の「異姓聯宗」が見られる。

> 按ずるに本県の荘氏と奉天厳氏は一つの族、大店王氏と山底薄氏は一つの族であり、賈・劉・王の 3 氏が一つの族であるようなものはとりわけ滅多にないことであり、古の人情の厚さの大いに称えられるところである。(32)

荘姓と厳姓の異姓聯宗は中国の広い範囲で見られるものだが、ここでは大店荘氏と奉天厳氏とが聯宗関係を結んでいるとされる。このように各族姓の系譜関係や族譜の記事に少なからぬ虚構が含まれている点は否定できない。結果、族譜の述べるところに従うならば、その虚構を前提とした言説のみが語られることとなり、それがあたかも史実であるかのように誤認されてしまう。

だが族譜の記事を子細に読み解いていくと、そこには基となった史実がある程度反映されていることも看取される。そこに別の史料を対照させることが可能となれば、より実態に近い像が浮かび上がってくるのではないだろうか。本節の作業はこの問題意識に基づき大店荘氏の物語を批判的に解読していくことを目的とする。先に検討したように彼らは自らの履歴を①起家時期、②停滞時期、③発展時期の 3 期に分けて認識しているので、ここでもその時期区分に基づき考察を進める。なお③の発展時期は荘氏が発展の軌道に乗った後のことであり、族譜の記述と史実の間にそれほど大きな懸隔があるとは考えられない。本稿の第Ⅴ節にて結論として整理したい。故に本節の重点は荘氏の歴史の前半部分に設定されることを予め断っておきたい。

1. 起家時期：明末万暦年間まで

荘氏を含む多くの族姓が自らを「明初の東海移民」の末裔と認識しているが、その真偽はどうか。もしかすると一部の族姓は本当に東海移民であったかもしれない。しかしある族姓は当地での東海移民伝説の流行を見て自らをその末裔と詐称した可能性も考えられる。考証を可能とする史料が存在しないのでその辨別は不可能である。

ここで議論すべきは彼らが真実の東海移民の後裔であるか否かではなく、彼らがどのように自分の出自の物語を錬成したかということである。本稿第Ⅱ節で整理したように、当地の族姓は「失考」（ある世代より前に遡ることが出来ない）、戦乱下での族譜の消失という理屈で空白部分の説明をしている。荘氏もまたその典型例と言えるのだが、彼らはそれを再編成することで自らの履歴の再構築を図った。

まず地方志『重修莒志』（1936 年刊）氏族表の金朝時期莒州に荘氏が居住していたという記述が明初東海移民の後裔という伝承と矛盾する点を検証したい。前節で述べた氏族表の荘氏プロフィールの一部を再掲しよう。

……大店西門の内側に昔から興福寺があり、その牆に金大定 4 年（1164 年）の度僧牒の刻石が嵌まっているが、碑の裏側に施主の姓名が書かれており、古（故）郡村のところに荘□、荘洪とあった。つまり荘氏の莒南県での居住は金朝より前の事である。
（しかし荘氏の原籍は東海十八村であって、明初に当地に移り住んだとされる。）

この大定 4 年（1164 年）の刻石に関する記述は 2002 年に刊行された第 8 次編集の族譜『魯莒大店荘氏族譜』でも言及されているが、これに先立つ第 7 修の族譜（宣統 2 年、1910 年刊行）には見出せない。拓出された文章は『重修莒志』巻 51「文献志・金石」に「勅賜興福禅院牒碑」として収録されている。荘氏族人の荘恩沢の手による跋に拠れば、彼が民国辛酉（1921 年）に人に命じて拓本を取らせ解読したものであるという[33]。故に第 7 修『荘氏族譜』編纂時（1910 年）にはまだ知られていない情報であり、民国 25 年（1936 年）刊行の『重修莒志』の記事が初出となる。上記引用部分の“古郡村”は拓本では“故郡村”表記されている。また荘洪の名は見えず荘政という名が記されていた。

『重修莒志』氏族表の荘氏のプロフィールでは、荘氏の居住が少なくとも金朝時代にまで遡ると示す一方で、彼らの原籍地が江南の東海十八村（或いは海東十八村）、明初に莒州へと来住したと叙述している。では出自にまつわる 2 つの物語の内どちらが採用されたのか。現在に至るまで荘氏はその他の多くの族姓と同様、「東海伝説」にアイデンティティを持っている。金朝の時代に荘氏がこの地に居住していたという設定は東海伝説を塗り替えるほどの根拠、魅力、力量を具えていなかったと言えるだろう。この金朝時期の居住の痕跡は矛盾をはらみつつも参考程度として扱われ記憶の一角に据えられるようになった。とは言え完全に否定し抹消する必要もあるまい。先に引用した第 8 修族譜掲載の「大店荘氏今昔」も金朝時代の当地の荘姓について「調査したところ、彼らの後裔は早い段階で失考したのだろう（経査、他們的後裔早已失考）」とする[34]。

このように明初の東海移民の後裔と自称する荘氏であるが、当地に移り住んだ時点での「始遷祖」の氏名は不明であり何世代か後の荘瑜を始祖と定めている。まずはこの荘瑜が始祖と設定された由来を検証してみたい。第 7 修族譜『荘氏族譜』（1910 年刊）の「序」に収録される初修族譜の原序、長支世系の第 6 世荘士行の著した「重修家譜原序」（順治 18 年、1661 年）には次のように記される。

惜しむらくは東兵の大乱（明清交替の混乱）で族譜は失伝してしまった。士行は伝承を採集し、高齢の人びとを訪問し、ひそかに叙述し、その先人の残された真理を記録したのである。[35]

続いて荘士行の甥の長支世系第 7 世荘捷が第 2 次修譜を挙行した。その「続修家譜原序」（康熙 47 年、1708 年）には次のようにある。

なお叔父（荘士行）がはじめて編集した族譜の旧例、私（荘捷）が見聞きしたところを整序して詳しく記載し、一つ一つ記録した。[36]

明末以前の族譜が本当に存在していたかどうかは不明だが、これらは東兵（清軍）のもたらした兵乱で焼失してしまった。そこで長支世系第 6 世の荘士行が再度修譜に取りかかった。これが初修族譜（1661 年刊）である。続いてその 1 世代下の荘捷が第 2 次修譜（1708 年刊）に着手した。この 2 つの族譜は伝承の採取、古老への採訪によって情報が収集され、それを基にして明代中期の荘瑜が始祖として位置づけられた。第 1 次、第 2 次族譜編纂時点では荘瑜より前の空白は手つかずであり、むしろ荘瑜以降の世系をどのように情報を集めて整理したかが重要であった。

ところがこの始祖荘瑜以前の問題については乾隆年間の第 3 次修譜（乾隆 11 年、1746 年、首唱者は二支世系第 8 世の荘沛思）に際して新たな情報が添加されることとなる。すなわちそれが興福禅寺で発見された鉄鐘に刻まれた荘瑜以前の族人に関する銘文である。四支世系の第 9 世荘保泰が乾隆 2 年（1737 年）に著した「鐘図附記」には次のように記されている。

明末清初の戦乱により旧譜は失伝してしまい、新たに編集した族譜は荘士行の手によるものだが、彼の編集する所の譜は瑜を始祖としていた。荘捷が続いて族譜を編んだ時も旧に習い、荘瑜以前は何世代経ているのか分からず、遡及して考証することができなかった。[37]

これまで荘瑜以前の系譜は判明しなかったが、乾隆元年（1736 年）に興福禅寺より千斤の鉄鐘が発掘されたことで新たな“事実”が加わることになる。この後に続く内容をまとめると次のようになる。鉄鐘には明代の正徳 6 年（1511 年）3 月 14 日の日付が入っており、施主の名は全て荘氏族人であった。上列に荘福、荘満、荘路の 3 名、中列に息子として荘政、荘瑜、荘慶、荘清、荘永、荘成の 5 名、さらに下列に孫世代として荘海、荘漣、荘浩の 3 名が並べられている。この孫世代の 3 人は荘瑜の子供たち、それぞれ長支、二支、三支の各世系第 2 世族人の名と一致している。四支世系の族人の名は見えないので、まだ生まれていなかったと考えられる。始祖の荘瑜の上には荘福ら 1 世代が列せられ、正徳 6 年に荘瑜にちょうど息子たちが誕生しつつあったので、彼はこの頃青壮年であったと推定できよう。

考えるに鐘図の息子と孫の多さから、荘福は当時大体 60 歳余りだった。荘福が生まれたのは正統年間でなければ景泰年間である。正統年間から洪武年間は僅か 58 年、景泰年間から洪武年間は 72 年、荘氏の朱陳店での居住歴は 3 世代でなければ 4 世代である。[38]

鉄鐘の発見と荘保泰の考証によって始祖の荘瑜より前に数世代あるだろうという説が提起され、遡って明初の東海移民へと物語を連結させる試みがなされた。これが事実かあるいは虚構

かは判別できない。ただこれが乾隆年間に歴史的事実として認定され、明初に連なる系譜の可能性が濃厚であると再認識された点が重要である。なぜ乾隆年間になってから新たな事実が発見され荘氏出自の物語に彩りが添えられたのかについては、本稿結論で再考する。

結局明初の東海移民であるか否かについては不明のままである。荘瑜の後、数世代をかけて彼らは族人の科挙受験を可能とする経済力を蓄えた。これを実証する術はないが間違いはあるまい。第 2 世代で 5 人の子どもがそれぞれ分支を形成、三支と五支はそれぞれ失考、流離失所により居所も不明となり(39)、大店荘氏は実質、長支、二支、四支の 3 つの房支によって構成される。この内、四支世系の第 2 世荘秀の孫世代、第 4 世の荘希孔、荘希孟、荘希禹の 3 兄弟の子孫たちが明末清初にそれぞれ違った途を歩むようになるが、この点は次項で述べる。荘希孟の息子である第 5 世の荘謙が万暦 40 年（1612 年）に挙人、万暦 47 年（1619 年）に進士に合格した。彼が荘氏最初の科挙合格者である。その甥の第 6 世荘永齢は順治 11 年（1654 年）に挙人、続いて順治 18 年（1661 年）に進士となった。以降、この荘希孟の子孫たちが民国期に至るまで大店荘氏の中心的存在を占めることとなる。

2. 停滞時期：明末清初から乾隆年間まで

第 5 世荘謙（万暦 47 年、1619 年進士）と第 6 世荘永齢（順治 18 年、1661 年進士）の科挙合格から第 10 世荘闇の挙人合格（乾隆 25 年、1760 年）までの間、荘氏から科挙合格者が誕生することはなかった。この間は一種の停滞状態にあったと言える。この時期にまず問題となるのが第 5 世族人荘鼐の反清活動に関わる伝承である。荘氏が停滞の一因をここに求めている以上、その真偽を明らかにする作業は必要であろう。本項では始めに荘鼐の伝説の概要を述べ、続いて地方志と檔案に記される荘鼐の反清活動の事実関係を整理、最後にそこから導き出される明末清初期における荘氏の実像を考察することとする。

① 荘調之伝説の概要

荘鼐は各種史料上ではその“字（あざな）”である調之をもって呼称されることが多い。彼は清末の第 7 次編纂の族譜（1910 年刊）には立伝されていない。後述するように彼の名は清代に著された地方志で「土寇」「莒州賊」「荘逆」という名称が冠されており、荘氏にとって忌避するべき存在であったからである。現在の荘調之の伝説につながる伝承の“文字化された”原本は民国期の『重修莒志』文献志・人物に収録される荘調之（荘鼐）の伝である(40)。以下、幾つかの部分に分けて内容をまとめることとする。

荘調之、名は鼐であり、字で通用している。……。明の天啓年間に軍に入り功績を挙げ洛口守備を授けられた。天下が乱れるのを見て官を辞して故郷へ帰った。崇禎 17 年（1644 年）崇禎帝の崩御を聞き、志士を糾合し義を唱えて復明を図り、数万人の人びとを集め、近隣の

県を攻めた。日照県を攻略するに、その部隊は安東衛郷官の御史蘇経と険悪になった。蘇練兵は自ら守りを固め、日照の給諫丁允元にこれを邀撃しその頭領を滅ぼそうとさせた。荘調之は遂に濤雒に兵を進め、村の西二里ばかりのところに駐屯し、明け方をもって攻撃することとした。ちょうど諸城県の丁耀亢が当地に立ち寄り、もとより調之が豪俠であることを耳にしていたので、夜にその軍営へと入ると、調之はこれに接見し大いに喜び、酒を命じて来訪の理由を問うた。……。[41]

荘調之は地域の豪俠で相当の軍勢を整え、明末の混乱に際して近隣の諸県へと兵を進めた。一種の“寇”的性格を窺い見ることができよう。光緒『日照県志』の記述に拠れば彼ら武装勢力と監察御史蘇経との武力衝突は崇禎 17 年（順治元年、1944 年）のことであると考えられる[42]。なお後述するように地方志の記事によっては荘調之ではなく曹武生という人物が攻撃したとされる。この 2 人の人物は当時から混同される傾向にあったようだ。

この最後に記される濤雒の軍営での丁耀亢との会見は興味深い。彼は諸城県出身の文学者である。この場面は丁耀亢の著した『出劫紀略』（順治 13 年、1656 年序）に収録される「従軍録事」中にもほぼ同じ描写が現れている[43]。『重修莒志』の荘調之伝は丁耀亢の著作の一節を底本としたのだろう。丁はこの引用部分に続けて荘調之に対し攻撃は無辜の民を虐殺することになるのでその停止を求める。幾つかのやりとりが交わされた後に荘調之もまた丁の進言を聞き入れる、という筋書きであった。ただし『重修莒志』の荘調之の伝中では丁耀亢の言として、

丁耀亢が言うには、今、満洲の兵（清朝軍）が中国内地に入り、北方の郡県はその勢いを見て降伏しているというのに、どうしてわざわざ仲違いをして争うのか。蘇練兵と丁給諫は本来求めるところが違うので、情勢を見て逃げてしまい、残っている者は村人だけだ。[44]

とあり、無益な殺戮を戒めた。つまり、清軍が迫る最中に漢人同士で対立をするべきではない、という説得がなされているのだが、『出劫紀略』所収の「従軍録事」では文脈が些か異なっている。同書では「（丁耀亢が言うには）今、天下は大いに乱れ、王侯たるあなた方はひとたび過ちを犯せば賊になってしまい、大事が去ってしまうだろう。私はそれを深く惜しむので、わざわざ危険を冒してやってきた」とある[45]。すなわち明末の混乱（天下大乱）とは述べられているが、清軍の入関とは明言されていない。むしろ民国期の荘鼐（荘調之）伝説の原本である『重修莒志』が意図的に“清朝への抵抗者”という容貌を付与、強調したのである。

では続いて荘調之伝の第二段落を見てみたい。この部分では諸城の九仙山に築いた拠点が陥落する顛末が記される。明末にしばしば大金・清朝は長城の南側へと兵を進めていた。莒州においては崇禎 15 年（1642 年）3 月と 16 年（1643 年）3 月に大規模な侵攻があったとされる。この二度の侵攻で莒州は荒廃し「土地は尽く荒廃し、戸口はわずかに十の内二、三を残すのみだった」という[46]。この侵攻に際して莒州地域社会では当地の人びとの武装集団が勢力を拡大させていた。

この秋（順治元年、1644 年）のこと。荘調之は諸城の九仙山に拠点を築き、遠近に呼びかけ、期を定めて兵を起こすことを計画した。当時清軍は既に山東を陥落させており、知県の程□は膠州総兵柯永盛に出兵を要請、副将の連某が荘調之を撃滅することになった。山上に大きな泉があり、万人が汲み取っても尽きることはなかったのだが、ここに至って突如涸れてしまい、部隊は遂に壊滅してしまった。荘調之は逃げ落ちたが、その子の某は捕らえられ、屈服せずに殺された。ほどなくして淮安の劉沢清が清に降伏し、各地の義軍は瓦解した。[47]

“この秋”とは地方志によっては崇禎 16 年と記すものもあるが順治元年（崇禎 17 年、1644 年）の秋が正しい[48]。この部分から荘調之がその息子と共に周囲の人びとを糾合して清軍に抵抗したことが読み取れる。しかし最終的に砦は陥落し、彼は逃亡に成功するもののその息子は捕らえられ刑死した。後述するように康熙 12 年刊の『諸城県志』にはその息子の名前が“馘”であると記されている。この名は荘氏族譜の系図でも確認できるので、記述の信頼性は高い。同県志には泉の枯渇による陥落についても触れられている。その真偽は確かめようもないが、この伝承がはやくも清初には出現していた点は事実と言えよう。『重修莒志』はこの伝承もまたその一部に取り込んだのである。

九仙山の陥落後、荘調之は北京に潜入しある計画の実行に取りかかった。続く第三段落には次のように記されている。

調之は帰する所もなくなってしまったが、もとより騎射を習っており射てば当たらぬことがなかったので、北京に潜入しあるたくらみを計画した。ちょうど摂政王ドルゴンの郊天祭祀に会し、調之は隠れ潜み王に向かって一矢を放った。だが矢は外れてその衣の留め具を落としただけであった。左右の者は驚き追跡したが、荘調之はすばやい身のこなしで騎乗する所の白馬は日に千里を馳せ、無事に逃げ果せた。遺された矢には「明将軍荘調之」という字が刻まれており、清廷は急ぎ県に捜索の手を向け族譜を探させた。族人は憂い恐れ族譜から調之の名を消し去ることで禍を逃れることができた。……[49]

この第三段落が荘調之伝説の最も中心となる部分、現在の莒南県大店鎮で人口に膾炙する荘鼐の物語最大の“ヤマ場”である。第二段落の内容は荘鼐の反清活動という一定の史実を根底に置いていた。対してこのくだりは躍動感にあふれた筆致で通俗文学の趣を帯びている。勿論、歴史的事実は一切含まれてはいない。続く第四段落は伝説の締めくくりとして荘鼐と荘氏一族との決別が描かれている。

順治年間のこと、甥の荘永齢が会試に赴く際、河北・山東間の道の傍らにある林の中で荘調之に出会った。調之は箱を一つ投げ渡し、異民族に仕えるなと戒め、騎乗し馳せ去った。箱を空けると崇禎甲申の年の暦一冊、断金数両だけが入っていた。その後の消息は遂に絶えた。

……。調之の従兄弟の荘整、荘復もまた共に義軍に加わった。荘整はかつて遼東守備に任ぜられていたが、その後どうなったかは分からない。[50]

この部分も象徴的である。第 6 世荘永齢は順治 18 年（1661 年）に進士となるが、北京に会試に赴く際、林の中で荘鼐に出会ったという。これもまた事実とは考えられないが、第四段落のクライマックスを締めくくる部分として叙情的に物語に彩りを添えている。“異族（異民族）”とは満洲人を指しており、ここに荘調之の反清のスタンス、“民族英雄”としての性格が強調されたのである。このイメージは勿論民国期に入ってから添加されたものだった。

以上が現在の荘鼐（荘調之）伝説の概要である。続いて地方志及び檔案にどのように荘鼐が描かれているかを確認する。

② 地方志・檔案に現れる明末清初の荘鼐

『重修莒志』荘調之伝の第一段落、第二段落は明末の反清武装勢力としての荘鼐の物語を叙述していた。第一段落では沿海の日照県及び贛榆県での官府との衝突、第二段落では諸城県の九仙山の陥落に至るまでの顛末がそれぞれ描かれている。では同時期の史料は彼をどのように扱っているのか。清代に編纂された山東省南東部の地方志には明末清初の動乱に関する記事が数多く収録されており、当地で騒擾・反乱が頻発していた状況が窺い知れる。例えば第二段落の九仙山の攻防戦については、康熙 12 年（1673 年）刊行の『諸城県志』巻 9「兵火」が詳しい。

順治元年（1644 年）9 月、土寇の荘調之が九仙山に拠って反乱を起こした。知県の程□は膠州に要請し連副将が兵を率いこれを撃滅した。山頂に古くから大きな泉があり、万人が汲んでも尽きることがなかったが、ここに至って突然涸れてしまい、荘の賊軍は遁走した。その子、荘馘を捕らえ斬った。[51]

“膠州”とは膠州総兵の柯永盛、“連副将”とは連洗という人物である[52]。すでにこの時膠州は清軍の手に落ちており、彼らは九仙山に立てこもる“土寇”荘調之らの討伐に当たった。先述の通り山頂の泉の枯渇という筋書きは『重修莒志』の荘調之伝の第二段落に描かれる場面と同じである。

また別の地方志、乾隆 25 年（1760）刊行の『沂州府志』巻 15「記事」及び巻 24「仕進下」所載の周連茄の伝には次のようにある。

崇禎 16 年（1643 年）……。莒州の賊、曹武生が賊千余りを率いて日照県を掠め、九仙山に拠ったが、諸城県知県の程□、膠州の連副将に平定された。[53]

周連茄　兵卒より官途に就き参将まで上った。清初に満洲兵を領して山東の残党を盗伐した。その時荘逆（※荘調之）が兵七百を率いて官軍となり安東衛へ入り、曹武生の賊徒と内応を約していた。周はこの知らせを聞き一夜にして馳せ到り包囲を解いたことで安東衛は全きを得た。[54]

『沂州府志』の記事では崇禎 16 年とされているが、荘調之の実際の軍事行動は崇禎 17 年（順治元年、1644 年）2 月以降本格化している[55]。前者の記述からは莒州の賊“曹武生”が日照を劫掠、諸城の九仙山に拠点を築いていたこと、後者からは“荘逆（荘調之）”が曹と連携を取り日照県、安東衛へと奸計を用いて攻め込んだことが読み取れる。これらの点は前項の荘調之伝説のそれぞれ第一段落（莒州東方、日照県への進撃）、第二段落（九仙山の戦い）と内容が近似しているので、伝説の背景となる事柄にはある一定の信頼に足る事実があったと判断できる。

前者の日照県への進撃は“莒州の賊曹武生”という人物によるとされている。彼は何者だろうか。この事件について日照県の隣県である江蘇省贛榆県の県志、嘉慶元年刊行『贛榆県志』巻 3「兵燹」は次のように叙述している。

崇禎 16 年（1643 年）山東で賊が大いに起こり、賊の頭領曹武生、荘調之らは人びとを率いて県城を攻めた。城はほとんど陥落しそうになったが、銀や馬などをこれに献上することで焚掠は免れたが、郷鎮は降伏を迫られほとんど壊滅してしまった。[56]

この嘉慶元年刊行『贛榆県志』巻 3「兵燹」によって曹武生と荘調之が同じ武装勢力として併称され、人びとをまとめ上げ周辺の諸県を攻撃したことが明らかとなった。当時の山東省南東部から江蘇省北東沿海部にかけては彼らのような領袖が武装勢力を結成し騒擾事件や反乱を起こしていたという点は間違いあるまい。

ただし彼ら 2 人の関係性について、道光 25 年（1845 年）刊行の『重修膠州志』巻 34「大事」は旧志を比較しつつ、

順治元年（1644 年）9 月柯永盛は部将の連洗を諸城に派遣、賊徒を平定させた。
【割注】諸城志は莒州の賊荘調之が九仙山に拠り反乱を起こしたとしているが、沂州府志では莒賊曹武生としている。[57]

と述べる。この諸城志とは乾隆 29 年（1764 年）刊の『諸城県志』[58]、沂州府志は前引の乾隆 25 年刊の『沂州府志』を指しており、荘調之と曹武生が時として混同されていたことがわかる。このような両者の取り違えは下の『重修莒志』の中ですら発生していた。

以上の地方志は最も早いものでも事件から 30 年近く経った康熙年間に著された。康熙 12 年（1673 年）刊行の『諸城県志』のような早期の地方志であれば事件を目睹した人びとも存命で

あり記述の信頼性も高い。しかし“泉の枯渇による砦の陥落”というある種民間伝承のようなものをあたかも史実のように取り扱っているので、この点は慎重な検証が求められる。また時間が経つにつれて歴史記憶が次第に変形していく可能性は否定できまい。現在の莊鼐（調之）伝説の原本となった民国期の『重修莒志』の伝は、幾分の史実を含みつつも客観的な事実を伝えているとは言い難い。参考として叛乱者のもう一人のかたわれ、曹武生がどのように扱われているのかを見ておきたい。武生、すなわち武庠生の称号を付けられているところからも、彼の本名を含めた素姓はよく分からない。『重修莒志』に彼の伝は収録されていないが、巻 34「軍事」崇禎 17 年（1644 年）の項目に詳細な記述がある。

……曹武生は莒州店頭村の人である。妖術をもって愚民を惑わし、数千人を集めて叛乱を起こした。東南に白馬坡廟があるが、林や岡が入り組んでいるので、ここに拠って営や砦を建て烽火台を設けて近県を劫掠した。その威勢は鳴り響き、さらに安東衛を攻めた。監察御史の蘇経は衛の人であり命を奉じ原籍に戻っていたので、この勦討と防衛にあたった。当時盗匪が蜂起し兵糧は乏しかったが（蘇経は）莒州・日照の富室の糧食を借りて郷勇数千を募り、曹軍へと進撃した。相い対すること数ヶ月、薛家河で会戦した。戦闘がたけなわになったところで曹武生は臂を振るい妖術を発し賊徒を鼓舞し突撃させた。官軍がやや退いたところ、泉子頭の義士李汝栄なる者、その子八人は皆武芸に優れ勇敢で胆力があった。蘇経の敗北を耳にするや馳せて賊陣へと突撃し数十人を殺傷した。曹武生は驚愕し、賊衆は乱れた。蘇経は軍を戻して転戦、追撃すること三十里、捕らえ殺した者は甚だ多く、龍王頭村に到り曹武生は井戸に身を投じて自害した。(59)

この曹武生の記事に出てくる御史の蘇経は、先に検討した『重修莒志』の莊調之の伝にも登場するが、そちらでは戦火を交えたのは莊調之（莊鼐）とされていた。九仙山の戦いでも地方志によっては叛乱者は莊鼐ではなく曹武生とされていた。この点は前引の道光年間『重修膠州志』もまた指摘するところであった。本来、莊鼐と曹武生は明末清初山東省東南の叛乱者という点で共通する立場であったはずである。乾隆『沂州府志』の周連茄伝のように両者は共謀して安東衛を掠め取ろうとしたのかもしれない。

しかし民国期の『重修莒志』では莊鼐と曹武生の評価はそれぞれ全く正反対のものに固定化された。この分岐の理由は定かではないが、おそらくは莊鼐が民国期莒州地域社会の名族、望族の家系に連なる人物であるのに対して、曹武生は本名すらも定かではない“無名人士”であったが故ではないか。漢民族の大義に生きる侠的性格、称揚すべき民族英雄としての属性は前者に付与された。一方妖術を以て人を惑わす邪教的性格、地域社会に害を為す土匪土寇という属性はすべて後者に押しつけられた。その後、このイメージが固定化し莊鼐は莒州の“名士”、莊氏宗族の物語の中で欠くことの出来ない重要人物として現在まで語り継がれているのである。

再び崇禎 16 年（1643 年）、崇禎 17 年（順治元年、1644 年）の莒州へと目を向ける。地方志の検討によって荘鼐の伝説をある程度相対化させることができたが、さらに客観的な事実を知る為にはその当時の実録や檔案を繙かねばなるまい。残念ながら『清実録』には山東平定の進行を記録する條はあるものの、微視的な分析を可能とする記述は見当たらなかった。

一方、台湾の中央研究院歴史語言研究所の『内閣大庫檔案』の中に荘鼐ら武装勢力の活動並びに彼と荘氏一族との関係に言及する檔案を見出すことができる。またほぼ同内容の檔案が北京の第一歴史檔案館にも収蔵されているが、これは中国人民大学歴史系・中国第一歴史檔案館合編『清代農民戦争史資料選編』第一冊（上）、中国人民大学出版社、1991 年に収録されている。本稿では利用の便を考えこの資料集に収録された檔案を利用することとする[60]。以下、資料集に「荘鼐抗清及被俘情形」（順治 2 年、1645 年 8 月 24 日）と標題を付けられた檔案の内容を検討する。

> 青州府の上申によれば次のようにある。莒州生員の荘亮彩の報告によれば「賊の頭領荘鼐は去年 2 月の間に兵 20 余万を集め、執溝、青口等で放火掠奪殺戮を行いました。先に〔亮〕彩の祖母を殺害し、後に 6 月になると伯父の荘士英、叔父の荘士豪、荘士超、荘士補（※族譜によれば荘士璞）、弟の荘永兗を殺害し、また諸城、日照、沂水、沂州等の諸県を攻撃しました。10 月には膠州総兵の柯〔永盛〕の招撫を受け麾下に入りましたが、11 月にまた賊徒の首魁趙慎寛、李大烈とともに逃亡し兵を合わせて、九仙山に軍を興したのです。膠州鎮の周副将らが追跡、その家族を捕らえ殺害しましたが、荘鼐は劉沢清の麾下に身を投じ、〔江蘇省〕海州へ潜入しこれを占拠した後、沂州の劉副将と対戦、多くの官兵を殺害しました。沂州鎮はまた大軍を動員して海州を攻略し、莒州の南北を一つにまとめ身を置く場所をなくさせたので、荘鼐は莒州の馬蹄（※鬐か？）山に潜伏しました。〔亮〕彩は父の荘士純とこれを聞知し、人を遣わしてこれを捕縛、上荘まで連れて行きました。賊党がこれを遮り奪還するかもしれないので、敢えてこれより進みませんので、官兵百名を派遣し捕縛していただくことをお願いします」とのこと。以上の報告が青州府に届いた。……

清初の時点で莒州は青州府の所属である。荘氏族人の第 7 世荘亮彩が第 5 世荘鼐の武装叛乱について青州府に報告した内容がこの檔案に収録されている。檔案は順治 2 年 8 月に作製されているが、その時点から見て昨年、すなわち崇禎 17 年（順治元年、1644 年）2 月に荘鼐の挙兵があったとされる。荘鼐は 20 万の兵力を統率できる経済力と名望を具えた人物だったと考えることができるだろう。10 月に一旦清朝の膠州総兵の招撫を受けたが、この事実は族譜、『重修莒志』ともに全く触れないところである。再び賊徒を結集して叛乱、11 月に九仙山に拠って武力抗争を継続した。だがここで膠州総兵の攻撃によって陥落、その息子は殺害された。先に見た康熙 12 年刊行の『諸城県志』の記事では子は荘馘という名と記される。族譜とも齟齬はない。その後、別の賊頭（劉沢清）の下に身を寄せ莒州の南東方面、江蘇省沿海の海州へと向かいここを拠点とした。劉沢清は『重修莒志』荘調之伝にも登場し、“義軍”という位置づけを

されている。しかしこれも鎮圧され、最終的に莒州の馬蹄山（おそらくは馬鬐山か？）に逃げ込んだところ、荘亮彩の知る処となり、捕縛され官に引き渡されるという結果に至った。

荘鼐（調之）伝説は勿論のこと、各種地方志もまた彼の結末を明確にしていなかったが、彼は最終的には賊徒として処断されたものと考えられる。故に、当然のことながら摂政王ドルゴンの暗殺未遂も、荘永齢との邂逅並びに「異族に仕うる勿れ」と戒めるドラマティックな場面も無かった。彼は清朝の招撫を一度受け入れるも再度叛乱を起こした武装勢力のリーダー、緑林的性格を多分に具えた人物であった。実際の彼は反清運動を展開した民族英雄（民国期の歴史観）とは些か距離があり、前出の各種地方志に描かれる「莒州賊」「土寇」「荘逆」という評価とそれほど懸隔はないだろう。彼らは多くの人びとを糾合できる名望と財力を併せ持つ人物である一方で、明末清初の山東南東部の地域社会に多大な混乱をもたらす社会秩序の破壊者でもあった。だが既述の通りその後者のイメージは曹武生に押しつけられ、荘鼐は民族英雄としての側面を強調されたのである。

では荘鼐の反清運動の為に荘氏の発展は阻害されたのか。これは族人の荘亮彩らがその捕縛に貢献している以上、累が同族全体に及ぶとは考えられない。むしろ彼は荘鼐に家人を殺害された被害者であった。そして多分にその復讐が動機となって荘鼐を捕縛し官符へとつきだしたのである。

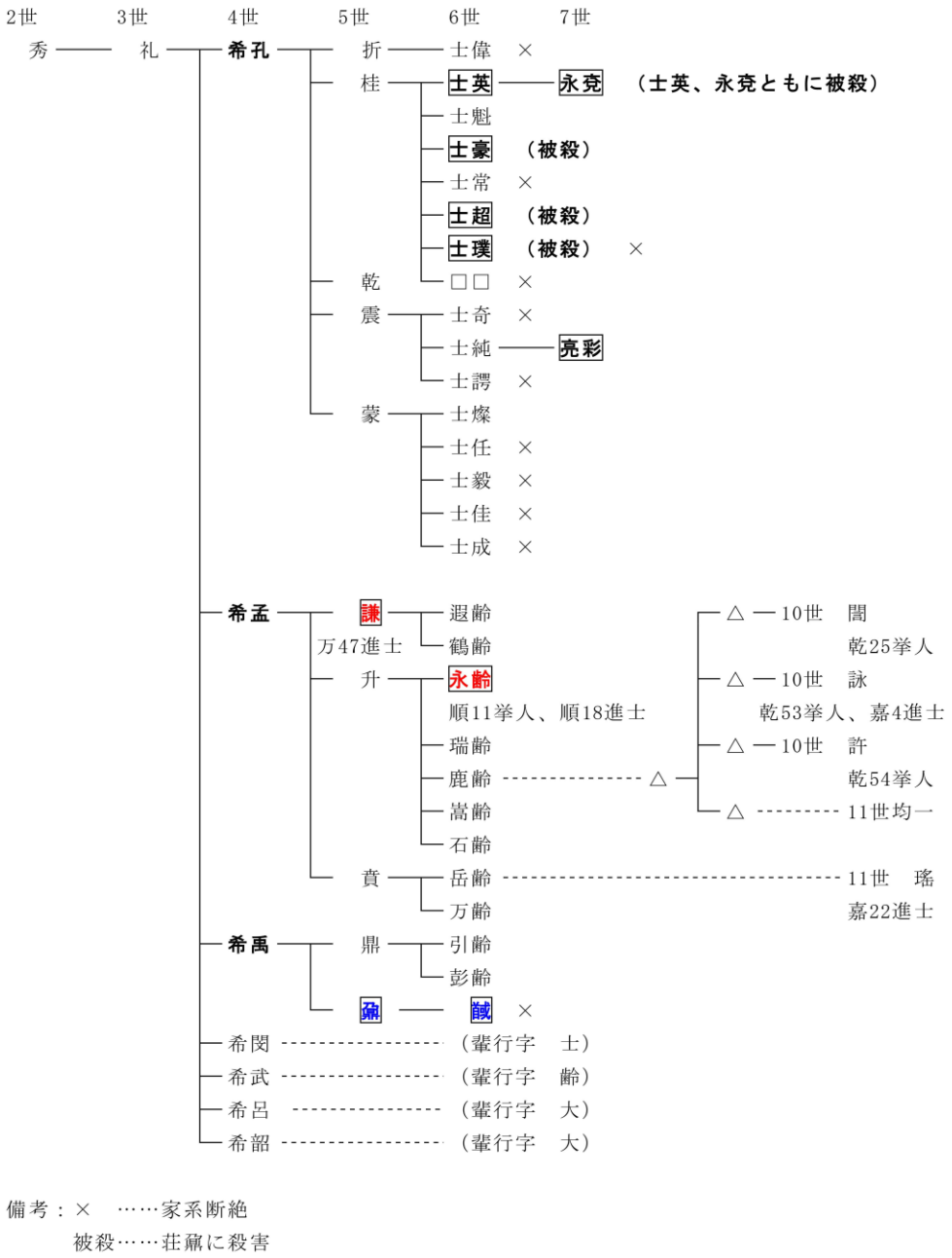
③　宗族内部の分岐：科挙官僚と武装勢力

直上の檔案資料には武装勢力の頭領の荘氏第 5 世荘鼐（調之）が親戚である荘姓の者たちを多数殺害していた情景が描かれている。彼はまず青州府に報告した荘亮彩の祖母、すなわち自分の義姉（第 5 世荘桂の妻）を殺害し、その後にその子供たち、自らにとって甥に当たる第 6 世荘士英、荘士豪、荘士超、荘士璞の 4 兄弟及び第 7 世荘永兗を殺戮した（次頁図 1 参照）。彼らの間でどのような諍いがあったのかは不明である。可能性としては地域社会における荘鼐の武装勢力としての活動が問題だったかもしれないが、考証に資する史料が存在しないので解明できない。

本稿第Ⅲ節で述べているとおり荘氏第 5 世の荘謙は明代の万暦年間に進士となった。この事実に基づけばこの頃の荘氏は宗族としてのまとまりを強化していたはずである。彼ら自身の歴史記憶も発展の軌道の起点をこの時点に据えている。一方で、檔案の記述からは同時期の第 5 世から第 7 世までの族人の間に深刻な対立があったことが明らかである。この 2 つの事象はどのように整合的に理解できるだろうか。

ここで改めて族譜に基づき明末清初期の荘氏宗族の組織を整理していきたい。既述の通り荘氏は始祖とされる荘瑜の 5 人の息子の代（第 2 世）で 5 つの分支を形成している。この内、三支世系は失考、五支世系は族人が少なく実質存在しないに等しい。残った長支、二支、四支の 3 つの分支が荘氏宗族を形成していく。大店荘氏最初の科挙合格者荘謙と荘永齢、明末の叛乱勢力のリーダー荘鼐、彼に家族を殺害され告発した荘亮彩はすべて四支世系の族人である。最

初に四支世系に注目し彼らが相互にどのような関係にあるのかを見てみよう。



備考：× ……家系断絶
被殺……荘鼐に殺害

図１　明末清初期大店荘氏四支世系表

四支世系は第 2 世荘秀から第 3 世荘礼へ続き、この荘礼は 7 人の息子をもうけた。名前の中に“希”という輩行字を共有する第 4 世の族人である。荘礼の 7 人の内、長男の荘希孔、次男

の荘希孟、三男の荘希禹の 3 人に注目すると、まず次男の荘希孟の子の第 5 世荘謙、荘升、荘賁の 3 兄弟の内、荘謙が万暦年間の挙人そして進士、荘升の長男、第 6 世荘永齢が順治年間の科挙合格者となった。その子孫からは乾隆年間以降科挙合格者が輩出されることとなる。言わば荘希孟は大店荘氏の中核を形成していく系譜の祖となったのである。三男の荘希禹の息子が明末の叛乱者、第 5 世の荘鼐である。彼は荘謙と従兄弟の関係にある。彼及びその息子の荘馘はこの軍事活動の中で命を落としたが、その経緯は先に考察した通りであるので割愛する。そして彼が殺害したのは、長男の荘希孔の孫世代を中心とする人びとであった。

つまり荘礼の息子の内、長男荘希孔の子孫は明末清初の戦乱で同族に殺害され、次男荘希孟の系譜は明清両朝の科挙に合格し発展の道を歩み始めた。三男荘希禹の息子は明末の武装勢力となって地域社会に頭角を現し、清朝とも敵対、その過程で親しい親戚をも多数殺害、最終的に自らの身も滅した。このように第 4 世 3 兄弟の子供たちはそれぞれが全く性格の異なる路を歩んでいく。何故、このように四支世系の第 4 世以降の各家族の方向性が何故分岐したのか、中でも同族間での殺人事件へと発展した原因については、族譜は勿論のこと、檔案も具体的な事実を何も記載していない。しかしその系図を子細に見ていくと、第 4 世の輩行字“希”世代の後、第 5 世代は全て名前が漢字一文字という共通点を有するが、その次の第 6 世の輩行字が統一性を失っていることが分かる。例えば荘礼の次男第 4 世荘希孟の下の科挙家族は第 6 世の輩行字は荘永齢、荘瑞齢、荘鹿齢……というように“齢”字に統一されている。第 4 世希孟を頂点とするとその子は 3 人（荘謙、荘升、荘賁）、その孫の第 6 世“齢”字世代が 9 人という家族の姿が浮かび上がってくる。すなわち女子成員を除き祖父荘希孟を上に抱く男子合計 13 人（女子成員を含めれば 20 数人）のごく親しい関係の小規模な房支がその実態であろう。この房支に第 5 世 3 人兄弟それぞれの個別家族が含まれていると考えればよい。

三男荘希禹の下は、武装集団の領袖荘鼐（調之）の子、荘馘を除いて“齢”というように荘希孟との共通性を見出すことができる。こちらは希禹を頂点として第 5 世荘鼎と荘鼐、孫の第 6 世荘引齢、荘彭齢、荘馘、男子成員 6 名という家族の姿が見える。女子成員が男子と同数存在するとすれば家族の規模は 12 名、華北の一般的な個別家族が 5 名程度であるので、やや大きな一般的個別家族の域を超えないと言える。この荘希孟と荘希禹は 6 世の輩行字が共通しているので比較的結びつきが強い関係だったと推測できる。

ところが荘鼐に殺害された長男荘希孔の下の第 6 世は荘士英、荘士豪、荘士超……と“士”字を輩行字とする。希孔は 5 人の子どもを設け、さらに孫世代（第 6 世）として 16 名を抱えていた。すなわち希孔を頂点として 22 名の男子成員、同数の女子成員を加えると大体 50 名弱の比較的大きな房支が形成され、この下に幾つかの個別家族が含まれていたと考えられる。彼らの第 6 世の輩行字“士”は直後に述べるように長支世系、二支世系と共通する傾向である。彼らは実の弟よりも長支、二支との整序した系譜的関係を選好したのであろう。あるいは逆に言えば荘希孟、荘希禹らの子孫の方が第 6 世に輩行字“齢”を設定し、“士”の集団とは距離を置いていたのかもしれない。ここに一種の族内の不和、宗族組織の分散を窺い見ることができる。荘希孔の孫たち、第 6 世“士”世代 16 名の内、子孫が断絶している族人が合計 10 名で

あった。檔案の記載に拠れば殺害されたのが 5 人（内 1 名は第 7 世）であったが、実際はもう少し多かったのかもしれない。

以上をまとめると四支世系は第 4 世までは次第に結集を強め第 5 世の荘謙の科挙合格をもたらすことができた。しかしその後、第 6 世は成功の階梯を登り始めた“齢”を共有する一群（荘謙、荘永齢の系譜）とそれ以外の“士”字集団に分岐していく。前者に親和性を持つ荘鼐とその子荘馘は武装勢力を形成し、最終的には衰退し滅亡した。明末清初期の宗族組織は一旦弛緩へと向かい、その分散した内部のグループ間で何らかの問題が発生、殺人事件へと発展したのではないかと推測できる。“士”字集団はその族内抗争の中で多くの族人を失い傍流へと追いやられたのだった。

この点を大店荘氏の長支世系、二支世系を含めた全体像から改めて確認してみよう。第 3 世の族人は長支世系が 2 人、二支世系が 2 人、四支世系が 3 人、合計 7 人が系譜に記載されている。彼らの名は全て一文字、輩行を表す共通点として基本的に“しめすへん”を含めている。この段階では始祖荘瑜を頂点とした個別家族の集合体という様相を呈しており、第 3 世の 7 人は始祖荘瑜の孫同士、密接な関係を結んでいたと考えられる（この段階で三支世系が存在していたかは不明、五支世系は各世代数名しかおらず無視してよい存在である）。続く第 4 世の族人は大体万暦初年前後のころに在世しており、長支世系 5 名、二支世系 6 名、四支世系 13 名を数える。第 4 世族人の合計は 24 名、配偶者を含めれば 50 名近くに上る。輩行字は既述の通り“希”で統一されているので、族人を統合する試みがなされ、宗族組織の萌芽が現れていたのかもしれない。そしてこの 50 名前後の集団が荘氏宗族初期の結集のピークであった。

ところがそれ以降の第 5 世より荘氏の系譜には“不協和音”が見られるようになる。第 5 世の輩行は一文字というのが二支世系と四支世系の共通点だが、長支世系の族人は二文字で“則”“臨”“芳”などという独自の輩行字を設けている。第 6 世に到っては二支世系の輩行字は“士”で統一されているが、長支世系では“鳴”“士”、四支世系では“士”“齢”をそれぞれ輩行字とする族人が入り交じるようになっている。この他、“大”字を共通の輩行とする一群もいる。この頃、四支世系のみならず長支、二支世系においても第 4 世で構築されていた比較的親密な関係は分裂し、宗族内部に新たな独立した房支が生まれていた。荘氏は科挙の合格者を出すことで結集力が高まったというよりは、その頃を頂点に再び分散へと向かっていたと考えるのが妥当である。繰り返すように荘謙、荘永齢の系譜は第 6 世に“齢”という独自の輩行字を設け、彼ら成功者だけが離脱して新たな宗族を形成する可能性も胚胎していたと言えるだろう。そして荘氏全体を見れば順治 18 年（1661 年）の進士、第 6 世荘永齢より乾隆 25 年（1760 年）の挙人、第 10 世荘闇の間、科挙合格者を生み出すことがなく、家運は衰退していたのである。

V　結びにかえて：乾隆年間の再結集へ

荘氏は明中期より血縁関係の凝集力を高め、第 4 世の頃には男子族人 20 数名、男女あわせて大体 50 名前後の小さな宗族を形成していたと推測できる。その営為は明万暦年間、第 5 世

荘謙の科挙合格に実を結んだ。ここまでを荘氏の起家時期とすると、明末清初から約 100 年間、乾隆年間の前半まではその停滞時期と見なすことができる。停滞の原因は一つは彼らの宗族組織が弛緩へ向かったことである。この宗族の活動の停滞は荘氏のみならず莒州地域社会全体で共通する傾向でもあった。族譜の世系を見る限り、第 6 世以降に輩行字の乱れが発生、拡大している（前掲図 1、後掲図 4）。第 7 世から第 10 世にかけては宗族全体どころか各分支（長支、二支、四支）、そして分支内の房支がそれぞれ独自の輩行字を設定しており全体の統一に欠ける。加えてそれぞれの分支もまた康熙年間半ば以降、第 7 世の頃に大店から居住地を遷していった。長支世系は第 7 世荘捷の代に莒州北部の東莞へ、二支世系も同じく第 7 世荘玉璽の時に大店の東にある紙房へ居を移した。荘氏の中核を形成することとなる四支世系のみが大店（当時は朱陳店と呼称）を中心に居住していた[61]。順治 18 年（1661 年）、康熙 47 年（1708 年）に第 1 次と第 2 次修譜が行われたとはいえ、その族譜の質は高くなかったようである。総じて荘氏は集中から分散へと向かいつつあった。その背景として莒州地域社会全体を取り巻く環境がこの時期に悪化していたことも看過できない。これは目下推論の段階であるが、荘氏停滞の原因の二つ目として康熙 23 年（1684 年）まで続く遷界令の影響、そして康熙年間の不況（いわゆる康熙デフレ）が当地に波及していた可能性は否定できない。当地の史料からは直接的に読み解くことはできないものの、遷界令は山東省南東部の主要港、日照と石臼所にほど近い莒州に多大な影響を与えていたかもしれない。松浦章氏の研究に拠れば、清代を通じて満洲地域と華中・華南を結ぶ沿海航路は南北の物資流通の重要な一角を占めていた。ただし康熙・雍正年間の船舶往来数は少なく、その隆盛は乾隆年間、特に嘉慶年間以降を待たねばならない[62]。筆者がかつて論じたように登州府・莱州府の宗族の成長にとって山東半島と対岸の満洲との経済的連関は規定的な役割を果たしていた[63]。沿海貿易の隆盛、満洲地域との人的往来の活発化が山東省東部の経済を底上げし、結果として宗族の発展を促していたのである。本文中でも紹介したとおり大店荘氏は奉天厳氏と聯宗関係にある。その内実は全く明らかではないものの、荘氏もまた満洲へと目を向けていた証左となろう。莒州地域社会では 18 世紀初の康熙年間半ば以降に宗族の活動に関する記事が史料中に姿を見せ始め、特に乾隆年間に入って以降はその数が増えていく。この傾向はおそらく康熙年間の不況からの脱却という全国的な景況変化、沿海航路の復活及び成長と歩調を合わせているのである。大店荘氏の復興もその中の一つの典型事例であった。

この康熙年間半ば以降の変化、分散から結集への転換点として想起されるのが乾隆元年（1736 年）に興福禅寺で発見された“鉄鐘”の銘文である。この銘文に基づいて第 3 次修譜（乾隆 11 年、1746 年）は始祖荘瑜以前の族人に関する記述を補った。すなわち四支世系第 9 世荘保泰が乾隆 2 年（1737 年）に著した「鐘図附記」である。「明末清初の戦乱により旧譜が失伝してしまった」為に従前の族譜では「瑜を始祖としていた」が、彼は銘文の考証に基づいて始祖の荘瑜の上にさらに 1 世代以上が存在している“事実”を明らかにした。この“鉄鐘”が真物か否か、その銘文の内容が本当かどうかはさほど重要ではない。“東海の出自”を真実らしく演出したこと、それが乾隆年間初年に成就したことが重要である。これによって彼らは莒州の多く

の族姓が“拠り所”としている明初の東海伝説へと自らの履歴を連結させることに成功したのだった。換言すれば、自らを明初東海移民に由来する由緒ある名家であると地域社会に知らしめたのである。同時期には科挙受験のための家塾「林後大学」を設置するなどの動きが見られた。これらの試みが乾隆 25 年（1760 年）、四支世系の第 10 世荘闇の挙人合格をもたらしたのである。

彼が科挙に合格した後、その従兄弟にあたる荘詠（嘉慶 4 年、1799 年進士）、荘許（乾隆 54 年、1879 年挙人）もまた科挙に合格し官途に就いた。この荘詠の父、第 9 世荘位中が第 4 次修譜（乾隆 43 年、1778 年）の中心人物である。第 1 次と第 2 次修譜では長支世系族人が、第 3 次では二支世系族人がそれぞれ首唱者となっていたが、第 4 次修譜以降はすべて四支世系の族人が中心を担っている。彼らの手で嘉慶 5 年（1800 年）に第 5 次、道光 12 年（1832 年）に第 6 次というように族譜編纂が約 30 年間隔で繰り返し実施された。これは科挙官僚を輩出する四支世系の中核部分が荘氏全体の主導権を握ったことを意味している。

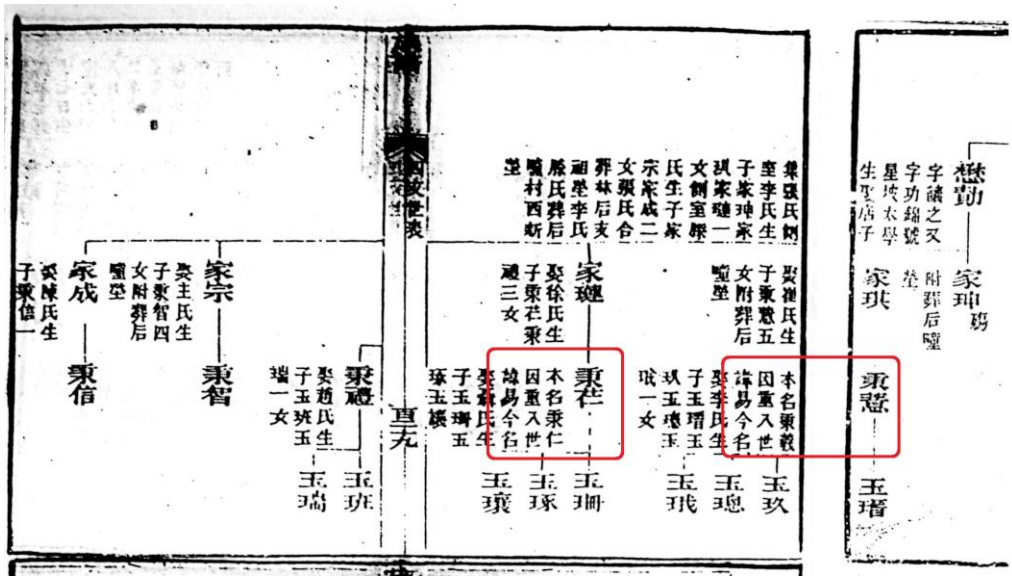


図 2　大店荘氏四支世系表（第 11～14 世）一部

第 5 修、第 6 修と族譜が版を重ねる間、荘氏は世代が第 10 世から第 11 世、第 12 世へと代わっていった。ほぼ同時期に定められた「荘氏族譜凡例」には次のように記されている。

一、わが一族は明洪武年間に莒州に移り住んで 300 年、我が本朝が成立して 100 年余りである。……今、旧譜を調べるに、その名前が重なっている者はこれを改め、その新たに命名する者はみな調査して誤りがないようにして、呼称に疑わしいところがないようにすることを願う。(64)

清朝の中国支配より数えて百余年のことであるから、この「凡例」は乾隆年間半ば、第 4 次修譜に前後して定められたのだろう。“名前が重なる”とは具体的に言えば日常的に顔をつき合わせる関係でないからこそ、偶然にも親戚同士で名前が一致してしまったことを指す。あるいは系譜関係を知悉せぬ故に祖先と同じ名前を子につける事態も発生していた。

前ページ図 2 は『荘氏族譜』「四支世表」の一部であるが、第 13 世の族人の注記に「本名〇〇、因重八世諱、易今名」と記され、名前が以前の族人のそれと重複したために改名措置を施したことがわかる。彼らは第 6 世荘鹿齢の子孫に当たる。鹿齢の世系からは科挙合格者が輩出されているので、荘氏の“骨幹”“中核”に位置する房支と見なせるだろう（図 1 参照）。彼ら 2 人の原名“秉義”と“秉仁”は、その第 6 世荘鹿齢の兄である荘瑞齢の孫（第 8 世）にあたる人物である。こちらも中核に近い房支である。この両者は 5 世代隔たっているものの、四支世系の中でも相当近い関係――少なくとも長支世系、二支世系よりも遙かに親しい関係――であることが分かるだろう。それにもかかわらず族人の名前が把握されていなかった点が興味深い。宗族の中でも中核となる集団であっても内実が分散的で相互の関係が希薄化していた様相が看取されるのである。

この動向を別の事例に基づきより詳しく見てみよう。「荘氏族譜凡例」は続けて族内の系譜関係を明確化するために次のような命名の法則を定めている。

> 一、……。第 10 世より前は敢えて妄りに変更するようなことはしないが、第 11 世以降は以下の通りとする。たとえば第 11 世は懋某、第 12 世は肇某として、以下此に倣って 2 文字で命名する。上の字は所定の字（※輩行字を指す）を用い、下の字は便に任せる。……(65)

この規則に従い、第 11 世以降の輩行字は宗族全体で統一していくこととなった。もちろんこれによって全ての族人が統一したルールの下で輩行字を共有するようになったわけではない。中核に近い家族は整序された命名規則を守るが、周縁、傍流の家族はこの秩序から外れるケースも多々見られた。族譜の系譜関係によればこの後徐々に 3、4 世代の時間をかけて、おおよそ清末民国期にはある程度輩行字が一致していくように見える。そのプロセスは大店荘氏が地域エリートへと上昇していく階梯と一致している。

この「凡例」を適用していく段階で問題となるのが、ちょうどその時在世していた第 11 世と第 12 世の族人の名前をどうするかということである。彼らの内、ある者は既に在世しているので、独自の名前をつけられている。彼らを巻き込んで宗族として統合していくためにはその名前を変更しなければならない。

そこで第 6 次修譜（道光 12 年、1832 年）では第 11 世、第 12 世の一部族人の名を新しい輩行字に基づき変更するという作業が行われた。これ以降のすべての族人の輩行字が統一されたわけではないが、中でも長支世系の族人に改名された形跡を数多く見出せる。図 3 は『荘氏族譜』の「長支世表」から引用した。この族譜の世表には現在の「名」と共に彼らの「原名」が附記されている。長支世系はすでに東莞へ移住、独自の路を歩んでいた。長支世系中のこの房

支の族人の名前は 2 文字で構成され、第 11 世の輩行字は“娶”、第 12 世を“復”と定めていた。しかし修譜に際して族人の輩行字を四支世系のそれに準拠し第 11 世“懋”、第 12 世“肇”に統一し、族譜の世系には各人に“原名〇娶”“原名復〇”と注記した。このような手続きを経て莒州南部の大店（朱陳店）居住の四支世系が莒州北部東莞居住の長支世系を統合したと言える。第 4 次から第 6 次までの修譜は、このように第 6 世以降分裂していった宗族を四支世系が中心となって再構築していく試みであった。

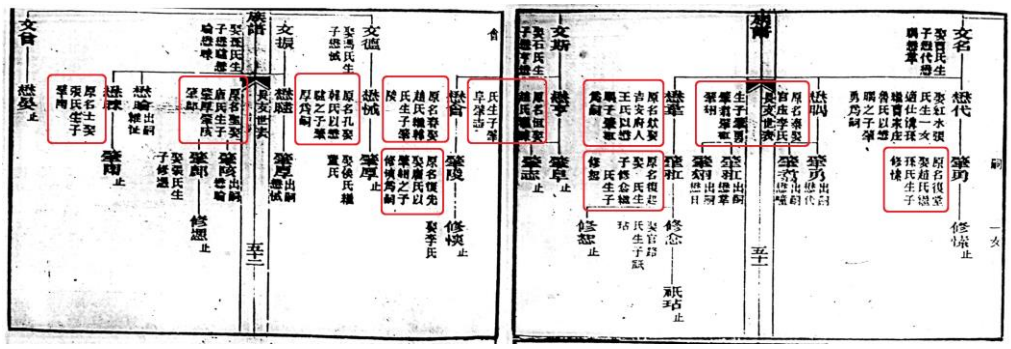


図 3　大店荘氏長支世系表（第 10～14 世）一部

この頃、荘氏はどれほどの家産を集積していたのだろうか。最後に特に中核部分に位置する家族の経済状態を考察し本稿を締めくくりたい。『清実録』に彼らの集積した財産の規模をうかがわせる記述がある。先にも触れた第 10 世荘詠は科挙合格者であるとともに第 5 次修譜の首唱者でもあった。荘氏宗族第 10 世族人中、最も著名な人物であると言えよう。彼は修譜に際してこれまでの族譜編纂の経緯をまとめ、先人の志を受け継ぎ族内の結束を唱えるのだが[66]、彼の家族はその従兄弟の子、第 11 世の荘均一とは不和であったようだ（前掲図 1 参照）。道光 6 年（1826 年）荘均一は既に亡くなった荘詠とその家族が不正を働いたとして次のように告発した。

> 告発に拠れば、彼（※荘均一）の物故した堂叔父の荘詠は先に滄州で任にあったときに銀両に欠損をだしていた。均一の堂叔の荘詡（※第 10 世）はその家産は蕩尽してしまったと報告したのだが、その実荘詠及びその子荘懋濂（※荘詠の子。第 10 世荘詩へ出嗣）等は全部で屯田 1 万 3 千畝、金融業 10 店余りを所有しており、報告内容は朦朧として捏造したものだった。荘均一は荘詡に自ら申し出るよう勧めたところ、反対にその子姪ら多数を率いて荘均一を殴った、とのことである。[67]

荘均一の告発からは 19 世紀の前半、第 11 世の頃に荘詠らの家族が 1 万 3 千畝の土地と商店を含む家産を集積していたこと、またこの家産が族産の類いではなく荘詠とその息子の個別家族の所有であったことが読み取れる。このような広大な土地を所有する在地地主が荘氏宗族の

科挙合格者を輩出する中核家族の姿であった。

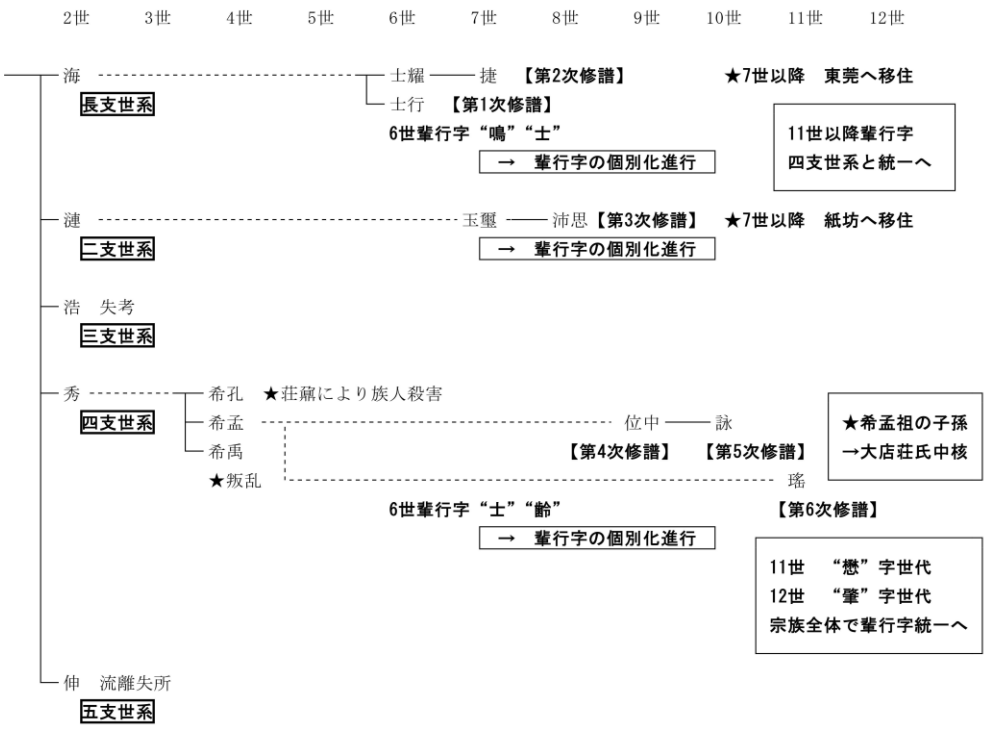


図 4　大店荘氏世系表概略

1944 年 5 月大店荘氏を闘争にかけた中国共産党の報告に拠れば、荘氏「合計 72 家の地主堂号は明清両代の大地主であった。土地は 480 頃と謳われ、双柳堂及び知松堂がそれぞれ 120 頃（1 万 2 千畝）と最多で、6，70 個の村落を擁し、百余里四方に分布していた」という[68]。この 20 世紀の半ばの闘争で打倒された最も有力な家族（堂号）が 1 万 2 千畝を所有していたことからすると、大体 19 世紀前半の嘉慶道光年間にはそれぞれの中核的家族に民国期まで継続する安定的な経済基盤が形成されていたと判断できる。

過去の族譜並びに現在の歴史記憶の中で大店荘氏は族内の揺るぎない親睦関係と不断に強化された結束を高らかに謳い、明清両代より現在まで途切れることのない“莒州第一の望族”と自らを誇っている。また過去に土地政策を通して在地地主層を打倒した共産党は荘氏に対して強固な支配基盤を有し周囲を圧迫する“封建堡塁”という評価を下していた。この両者は打倒した者、された者と立場は異なるが、その取り結ぶイメージはコインの裏表のようなもので、根底には“強い凝集力で結合した宗族組織”という認識があるように思われる。だがたとえ嘉慶道光年間の荘詠の家族、また民国期の双柳堂・知松堂のような大土地所有者がいたとしても、彼らが「大店荘氏」という集団を統御していたわけではない。乾嘉年間までは輩行字す

らも統一がとれておらず、相互の系譜関係はあいまいなままであった。その後、輩行字の統一など族内の系譜関係が整序されていくにつれて、宗族組織はある程度凝集力を高めたかもしれない。しかし民国期に至ってもいまだ宗族内の内部分化が大きかった点は指摘しておかねばならない。一部には所有地 1 万畝を超える大地主もいたが、もう一方では零落する家族もあった。族人の荘虔玉氏が 1993 年に著した「大店荘氏堂号考略」は「初歩的な調査によれば大店荘氏は 72 箇の堂号だけではなく、現在知られるだけで 150 余りの堂号があった」とする(69)。この“72 箇堂号”とは大店荘氏を表す称号として慣用されていたが、実際はもっと多数の房支が存在していたようである。仮にこの 72 箇堂号と称される数十家の個別家族が大店荘氏の中核に近い集団だったとする。この中の 2 家族（双柳堂と知松堂）が荘氏全体の土地 480 頃（4 万 8 千畝）内の半分の 240 頃（2 万 4 千畝）を所有していた。彼らを頂点としてその有力な数十家が寄り集まり、さらにその外縁部に疎遠な個別家族群が散漫に裾野を形成していた。

本稿で考察の対象とした大店荘氏は莒州地域社会の中では典型的な成功例と見なし得る宗族である。だがその組織は内部の分化、貧富の差も著しい緩やかな統合体というのが実際の姿であろう。筆者は前稿で 1930 年代の莒州宗族の群体が小規模の家族を中心とすることを明らかにした。荘氏も巨大な組織を構築しているように見えるが、中核部分の家族はともかくとして周縁部分はこの小さな個別家族の集合体とさほど変わらぬ性格ではなかったか。荘氏自身の自己評価や共産党の認識とは必ずしも一致せず、再生産され続けるイメージとは一定の懸隔がある。その清代後期以降における実態についてはまた機会を改めてより詳細に論ずることとしたい。

---

(1) さしあたり常建華『明代宗族研究』上海人民出版社、2005 年など。

(2) 陳其南「方志『氏族志』体例的演変与中国宗族発展的研究：附清光緒『郷土志』総目録」『漢学研究』3-2、1985 年。

(3) 荒武達朗「山東省地方志の氏族表について」『資料学の方法を探る』（愛媛大学「資料学」研究会）22、2023 年。

(4) 葛剣雄主編・曹樹基著『中国移民史』第 5 巻・明時期、福建人民出版社、1997 年、第 5 章「洪武大移民：山東篇」。中生勝美「中国華北平原の移住伝説」『人文研究』（大阪市立大学）54-8、2002 年。

(5) 莒州は雍正 7 年 12 月（同月は 1730 年）まで青州府下にあり、その後莒州直隷州に昇格、雍正 12 年（1734 年）に散州に改め沂州府下に置かれた。民国 2 年（1913 年）に莒県と改称、中華人民共和国の下で北部を莒県、南部を莒南県とし、それぞれ臨沂市と日照市の管轄下に所属。

(6) 盧少泉修・荘陔蘭纂『重修莒志』（民国 25 年、1936 年刊行）。以下、本稿では『重修莒志』と略記する。

(7) 荒武達朗「明清華北の地域社会と宗族：莒州の事例研究」『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』27、2019 年。なお拙稿に先立ち常建華「近世山東莒地宗族探略：以民国『重修莒志・民社志・氏族』為中心」

『安徽史学』2014-1、2014 年も当資料に注目し、莒州地域の宗族群体の全体像を明らかにしようとしている。

(8)「土俗、少宗祠、其歳時致祭多於墓於寢。」沈兆禕修・王景祜・陳景星纂修『臨沂県志』（民国 6 年、1917 年）巻 3「民風・葬祭」。

(9)荒武達朗「“闘争の果実”と農村経済：1945-47 年山東省南東部」『中国研究月報』71-10、2017 年。

(10)牧野巽「中国の移住伝説」（同『牧野巽著作集』第 5 巻・中国の移住伝説、御茶の水書房、1985 年所収）。山県千樹『華北に於ける現存諸部落（自然村）の発生』国立北京大学農村経済研究所、1941 年。山本斌『中国の民間伝承』太平出版社、1975 年。前掲葛剣雄主編・曹樹基著、1997 年、第 5 章「洪武大移民：山東篇」。前掲中生勝美、2002 年。

(11)荒武達朗『近代満洲の開発と移民：渤海を渡った人びと』汲古書院、2008 年、補論「近代満洲における“山東老郷”の形成：偽りの出身地」。

(12)前掲葛剣雄主編・曹樹基著、1997 年、第 5 章。東海（海東・海州）からの移民については同書 182-186 頁参照。

(13)前掲常建華、2014 年。

(14)「唯東海山中、澗泉林木、其穀宜稲、食用不待外求。民有老死未入城府者、亦無打門之吏、最為楽土。所謂東海十八村、村村出賢人、是也。」唐仲冕修・汪梅鼎纂『海州直隷志』（嘉慶 16 年、1811 年）巻 14「建置・保甲」。

(15)「当路村、在東海城北十里。漢鄒衍乗驢遊学至此憩豆田、旁豆被他畜先食、主誣衍驢、与辨弗信、遂剖驢視之果非、是夜飛霜豆盡死。古詩云、六月飛霜鄒衍屈、今亦名当驢村。」陳復亨纂修『海州志』（明隆慶年間、刊行年不明）巻 8「襍志・古跡」。

(16)王憲民『明清諸城王氏家族文化研究』中華書局、2013 年、第 1 章「雲台伝奇：諸城王氏移民考」、20-22 頁。

(17)朱亜非等『明清山東仕宦家族与家族文化』山東人民出版社，2009 年、第 1 章「綜述」、11-12 頁。

(18)「莊氏出於熊繹、至楚王侶諡莊、後以為氏。大店西門裏、旧有興福寺、牆嵌金大定四年度僧牒刻石、碑陰書施主姓名、古郡村有莊□莊洪、則莊氏之在莒南、自金以前矣。而莊氏譜牒、謂相伝原籍江南東海十八村、明洪武初年来莒朱陳店。而證之正徳六年興福禅院之鐘、名列三代、其奉為始祖瑜者、次居第二代第二名、可知以前尚有数代。特旧譜燬於明季兵燹、無可考證。本県外県莊氏不同譜者、亦未敢妄為敘列。故譜曰朱陳店莊氏族譜。始祖瑜二世分五支。長支海後分住……。二支漣後分住……。四支秀後分住……。五支伸後分住……。三支浩失考。今伝至十九世。始祖塋祠、俱在大店鎮、祭田六畝、坐落大店西湖大橋。……。」『重修莒志』巻 41「民社志・氏族」所録の「八区大店鎮莊氏」。

(19)莊琅「遷居家譜序」（雍正 12 年、1734 年）『莊氏族譜』（下注参照）所収によれば雍正年間にはすでに五支世系は「流離失所」とされていた。『莊氏族譜』の「五支世表」によれば第 8 世莊必敘がただ一人残された族人だったが、故郷を離れ 30 年以上戻って来なかったので、宗族全体で合議し四支世系の莊清の子、第 9 世莊思稷を後継として立嗣したという。おそらく乾隆年間半ば以降のことと思われる。

(20)第 8 次編纂（第 8 修）の『魯莒大店莊氏族譜』（2002 年刊行）の中に第 7 修の『莊氏族譜』（1909 年完成、1910 年刊行）も影印で収録された。本稿で第 8 修族譜を引用するに際しては『魯莒大店莊氏族譜』

と記し、第 7 修族譜の書誌情報は単に『荘氏族譜』と略記する。

(21)山東大店荘氏文化網　http://www.zhuangziwenhua.com/（2023 年 11 月 10 日閲覧）。

(22)荘維林・荘宿庭「大店荘氏今昔」『魯莒大店荘氏族譜』補正巻、2010 年、11-14 頁。著者はともに大店荘氏族人で長年当地の教育・文化活動に従事してきた。

(23)「一、家族源流　……現在的大店荘氏、拠宣統二年（1909 年　※1910 年の誤り）刊行的『荘氏族譜』記載、原籍江南東海郡海東村（也称海東十八村、址在今連雲港市雲台山北麓）、明洪武初年来莒朱陳店。明代譜牒、毀於兵火。清代第一次修譜、時在順治辛丑（1661 年）、根拠墓碑所記、墳塋可考、以荘瑜為始遷祖。乾隆丙辰（1736 年）、荘保泰在大店興福禅寺発現一千斤鉄鐘、洗去泥土、見鐘鋳於明正徳 6 年（1511 年）、所載之施主皆係荘氏。……。」

(24)「二、科挙仕進　……　大店荘氏的先祖、係明初（約 1368-1398 年）江南貧苦農民、一付担子来大店定居。経過一百多年勤労節倹、艱苦度日、至明正徳 6 年（1511 年）已温飽有余、有千斤鉄鐘捐贈寺院和供子弟読書的経済条件。」

(25)「到第五世荘謙、明万暦壬子科（1612 年）挙於郷、己未科（1619 年）中進士、授汝寧府推官,浙江道監察御史、巡按陝西。父親荘希孟敕封文林郎、監察御史、二弟荘升考取歳進士、三弟荘賁為廩生、叔弟荘鼎考廩膳生、荘鼐（字調之）考武庠生、任洛口守備、荘整任遼東守備、叔父荘希禹、荘希呂誥封威遠将軍、大店荘氏開始為仕宦家族。」

(26)「清兵入関後、荘調之在家郷組織義軍抗清、失敗後潜入北京謀刺摂政王多爾袞、未獲成功、遁跡江湖。清順治 18 年（1661 年）荘永齢中進士、授兵部主事、英年辞世。此後 80 余年、族人未有科第者、但家塾増多攻読不輟。為適応科挙需要、乾隆 6 年（1741 年）幾家出資在大店東北、潯河南岸的林後村創辦私学一所、初称“林後大学”、後称“因園”、延聘飽学宿儒為師、教授四書五経。……。」

(27)第 8 修『魯莒大店荘氏族譜』（2002 年）所修の「大店荘氏発展概況」はこの点につきより詳細に述べている。『重修莒志』の荘鼐の伝に基づき彼が清の朝廷から罪を受けたことが族人の栄達に影響があった（「調之祖獲罪於清廷、対族人之功名仕途不無影響」）とする。

(28)「乾隆庚辰科（1760 年）荘闇中挙人、揀発貴州知県。嘉慶 4 年（1799 年）庄詠中進士先後授知県、知府。還有荘許等考中挙人、出任知県、知州、教諭、訓導等、大店荘氏在政治上開始復興。此後読書之風更加興盛。嘉慶丁丑科（1818 年）荘瑶中進士、官至河南河北彰懐衛道。咸豊丙辰科（1856 年）荘瑶長子荘錫級中進士、出任山西大同知府。同治壬戌科（1862 年）荘予楨中進士、任湖南宝慶府知府。光緒戊戌科（1898 年）荘清吉中進士、為翰林院庶吉士。光緒甲辰科（光緒 30 年、1904 年）荘陔蘭中進士、授翰林院編修。」

(29)『重修莒志』巻 10・11「選挙表」、巻 32「経制志・教育・国外留学畢業生表」。

(30)荒武達朗「1850-1940 年山東省南部地域社会の地主と農民」『名古屋大学東洋史研究報告』30、2006 年。

(31)現存する莒州の地方志は張文範修・段章纂『莒州志』(康熙 11 年、1672 年刊)、李方膺・彭甲声修・戦錫侯・陳有蓄纂『莒州志』(乾隆 7 年、1742 年)、許紹錦纂修『莒州志』(嘉慶元年、1796 年）及びこれまでも繰り返し引用している盧少泉修・荘陔蘭纂『重修莒志』（民国 25 年、1936 年）の 4 種である。この内、乾隆年間『莒州志』所録の「修志前爵姓氏」「前修志姓氏」にそれ以前の地方志に携わった人物の名前が記されている。

(32)「按本県荘氏、与奉天厳氏為一族。大店王氏、与山底薄氏為一族。若三氏（※賈氏、劉氏、王氏を指す）一族、則尤為罕見、而古昔人情之厚、為足多矣。」『重修莒志』巻 41「民社志・氏族」所録の「七区賈劉王氏」の項目。

(33)荘恩沢「勅賜興福禅院牒碑　大定四年」『重修莒志』巻 51「文献志・金石」所収。発見の縁由は「民国辛酉夏回里、命工拓出、詳為辨識」ということだった。後に興福禅寺は学校に改築され、この牒碑は荘氏祠堂に収蔵された。

(34)前掲荘維林・荘宿庭、2010 年、12 頁。

(35)「惜自東兵大変、譜失其伝、〔士〕行採輯旧聞、訪諸高年、竊自記述、録其遺詮。」荘士行「重修家譜原序」（順治 18 年、1661 年）、『荘氏族譜』（1910 年刊）所収。荘士行は長支世系第 6 世。

(36)「仍叔父（※士行）創修之旧凡、捷之得見得聞者、歴歴詳載、一一登記。」荘捷「続修家譜原序」（康熙 47 年、1708 年）、『荘氏族譜』（1910 年刊）所収。荘捷は長支世系第 7 世。

(37)「自東兵大変、旧譜失伝、重修之譜出於士行祖手、而士行祖所修之譜、以瑜祖始焉。捷祖続修之仍其旧、瑜祖而上不知、閲伝幾世、遡不可考。」荘保泰「鐘図附記」（乾隆 2 年、1737 年）、『荘氏族譜』（1910 年刊）所収。荘保泰は四支世系第 9 世。

(38)「按鐘図男孫之衆、福祖当日約六旬有奇。福祖之生、非正統即景泰年間。正統至洪武僅五十八年、景泰至洪武七十二年、其居朱陳也、非三世即四世矣。」荘保泰「鐘図附記」（乾隆 2 年、1737 年）、『荘氏族譜』（1910 年刊）所収。

(39)前掲荘琅「遷居家譜序」（雍正 12 年、1734 年）『荘氏族譜』（1910 年刊）所収。荘琅は四支世系第 7 世である。

(40)『重修莒志』巻 61「文献志・人物六」。

(41)「荘調之、名鼐、以字行。……。明天啓間従軍積功、授洛口守備。見天下乱、棄官帰。崇禎十七年、聞思陵殉国、糾志士倡義謀恢復、集衆数万人、略地近県。徇日照、所部与安東衛郷官蘇御史搆悪、蘇練兵自衛、要日照丁給諫允元邀撃之、殲其渠。調之遂進兵濤雒、屯営村西二里許、期以旦日加兵。適諸城丁野鶴耀亢道出其地、素耳調之豪俠、夜入其軍、調之延接喜甚、命酒、叩以所来。……。」

(42)陳懋修・張庭詩・李堉纂『日照県志』（光緒 12 年、1886 年）巻 7「考鑑志・兵事」。

(43)丁耀亢「従軍録事」（『出劫紀略』順治 13 年、1656 年所収。丁耀亢撰・李増坡主編・張清吉校点『丁耀亢全集』下巻、中州古籍出版社、1999 年）、280-282 頁。

(44)「曰、今満洲兵入関、北方郡県、望風降服、何忍更為閲牆争。蘇丁二君、素望不同、又聞風而避、未去者僅村農。」

(45)「今天下大乱、為王侯皆君輩、一誤為賊、則大事去矣。吾所深惜之、故冒険而来。」前掲丁耀亢「従軍録事」、281 頁。

(46)「地尽荒、戸口僅存十之二三。」『重修莒志』巻 34「経制志・軍事」。

(47)「是秋、拠諸城之九仙山、号召遐邇、刻期図大挙。時清兵已下山東、知県程□請兵膠州総兵柯永盛遣副将連某撃之。山上有巨泉、万人渇（※挹？）取不竭、至是忽涸、衆遂潰。調之跳免、其子某被擒、不屈死。未幾淮鎮劉沢清降清、各地義師瓦解。」

(48)後述するように懋讓修・李文藻等纂『諸城県志』（乾隆 29 年、1764 年）巻 3「総紀下第二」よれば順

治元年 9 月のことであろう。ただし後に引用する順治 2 年 8 月 24 日の『内閣大庫檔案』の記述では順治元年 11 月に九仙山に立て籠もったとある。

(49)「調之益無所帰、素嫻騎射、発無不中、陰入燕都、図一逞。会清摂政王多爾袞代帝郊天、調之潜伏、目注王発一矢，誤落其衣紐。左右驚起窮索、調之善騰趠、所乗白馬日馳千里、故得従容去、遺矢鐫明将軍荘調之字、清廷捜捕、急行県索譜牒、族人惴懼、以譜無調之名始免禍。……。」

(50)「順治中、其従子永齢応礼部試、遇之（※荘調之）冀魯間道旁大林中、投以一篋、戒毋仕異族、旋上馬馳去。視其篋中、崇禎甲申暦書一册、断金数両而已。其後音耗遂絶。……。調之従兄弟荘整、荘復均与起義兵。整嘗任遼東守備、後皆不知所終。」

(51)「（順治元年）九月　土寇荘調之、拠九仙山為乱、知県程□請膠鎮遣連副将率兵撃之。山頂旧有巨泉、万人渒（※挹？）取不竭、至是忽涸、荘賊遁走、獲其子馘斬之。」卞穎修・王勸纂『諸城県志』（康熙 12 年、1673 年）巻 9「兵火」。同様の記述は宮懋讓修・李文藻等纂『諸城県志』（乾隆 29 年、1764 年）巻 3「総紀下第二」にも見えるが、子の荘馘の名がない等、若干の字句の異同がある。「莒州賊荘調之、拠九仙山為乱、程□請於膠州総兵柯永盛、遣副将連某率兵撃之。【割注】山頂旧有巨泉、万人渒（※挹？）取不竭、至是忽涸、調之遁走、獲其子斬之、余党悉平。」

(52)後継の張同声修・李図等纂『重修膠州志』（道光 25 年、1845 年）巻 34「記一　大事」の記事などから判明する。

(53)「〔崇禎〕十六年……。莒賊曹武生、率賊千余、掠日照、拠九仙山、為諸城知県程□、膠州連副将撃平之。」李希賢修・潘遇莘纂『沂州府志』（乾隆 25 年、1760 年）巻 15「記事上」。

(54)「周連茹　由行伍官至参将。清初領満兵、分討山東余孽。適有荘逆以甲士七百人、充官軍入衛城、約為曹寇内応、周聞之、一夜馳至、圍解衛城頼以全。」同上、巻 24「仕進下」。

(55)後述するように『内閣大庫檔案』順治 2 年 8 月 24 日の記事に拠れば順治元年（1644 年）2 月に挙兵したと考えられる。その前々年より清軍の侵入も始まり、当地域の騒乱は拡大していた。

(56)「十六年　山東盗大起、賊首曹武生、荘調之等、率衆攻城、城幾□、括銀馬等献之得免焚掠、郷鎮勒降幾盡。」王城修・周萃元纂『増修贛榆県志』（嘉慶元年、1796 年）巻 3「一兵燹」。

(57)「九月　永盛遣部将連洗之諸城平寇。【割注】諸城志、莒州賊荘調之、拠九仙山為乱、知県程□請於膠州総兵、遣部将連洗撃之。沂州府志作莒賊曹武生。」張同声修・李図等纂『重修膠州志』（道光 25 年、1845 年）巻 34「記一　大事」。

(58)この記事は先に引用した康熙 12 年刊の『諸城県志』には見えないが、宮懋讓修・李文藻等纂『諸城県志』（乾隆 29 年、1764 年）巻 3「総紀下第二」に「莒州賊荘調之、拠九仙山為乱、程□請於膠州総兵柯永盛、遣副将連某率兵撃之」とある。

(59)「……曹武生、邑之店頭村人。以左道惑愚民、聚徒数千為乱。東南有白馬坡廟、林岡盤紆、拠之立営汛、設烽火、寇掠鄰邑。声勢頗震、攻安東衛。御史蘇経衛人、奉旨回籍剿堵。時盗匪蠭起、兵餉俱匱、経假莒日両邑富室之糧、募勇数千、進撃之、相持数月、会戦於薛家河。戦酣武生振臂作妖術、揮衆突陣、官軍少却、有泉子頭義士李汝栄者、子八人、皆精武技、驍勇有膽略、聞経敗、馳赴突入賊陣、殺傷数十人、武生驚愕、衆乱、経回軍転闘、追奔三十里擒殺甚多、至龍王頭村、武生投井死。」『重修莒志』巻 34「経制志・軍事」。

(60)「拠青州府呈:拠莒州生員荘亮彩稟称:賊頭荘鼐、於去年二月間、招兵二十余万、焚劫殺掠執溝、青口等処、先将彩祖母殺死、後至六月内、殺死伯父荘士英、叔荘士豪、荘士超、荘士補、弟荘永兗、又攻諸城、日照、沂水、沂州等処城池。至十月内、蒙膠州柯総兵招撫標下。至十一月内、又与賊首趙慎寛、李大烈同逃合兵、在九仙山豎旗、被膠鎮周副将等追獲其家眷、殺敗。投赴劉沢清標下、鑽鎮海州後、与沂鎮劉副将対敵、殺傷官兵許多。沂鎮復調大兵攻破海州、南北一統、無処存身、逃往莒州馬蹄（※髻？）山潜藏。彩同父荘士純聞知、領人捉拿、帯至上荘、恐有賊党截劫、不敢前行、乞発官兵百名同拿等情。稟報到府。 ……。」台湾中央研究院史語所所蔵『内閣大庫檔案』登録号：037319-001。引用部分は「荘鼐抗清及被俘情形」順治2年（1645年）8月24日(中国人民大学歴史系・中国第一歴史檔案館合編『清代農民戦争史資料選編』第一冊（上）、中国人民大学出版社、1991年、59-60頁による。

(61)前掲の四支世系7世荘琅の執筆に係る「遷居家譜序」（雍正12年、1734年）。

(62)松浦章氏は順治元年（1644年）から光緒22年（1885年）にかけての朝鮮への漂流船合計182例を年代別に分類した。康熙年間（1662-1722年）と雍正年間（1723-35年）は1年当たり0.5隻、乾隆年間（1736-95年）1隻、嘉慶年間（1796-1820年）2隻、道光年間（1821-50年）0.9隻、咸豊年間（1851-61年）1.7隻、同治年間（1862-74年）と光緒年間（1875年以降）1隻であり、康熙・雍正年間の漂流船数（そこから類推される船舶往来数）が少ないことを示している。松浦章『清代帆船沿海航運史の研究』関西大学出版部、2010 年第1編第1章「朝鮮国漂着中国帆船の『問条別単』について」（原文1984･85年刊行）。

(63)前掲荒武達朗、2008年は山東と満洲間の往来の実態、並びにその中で宗族などの血縁組織が果たす役割について論じた。また荒武達朗「19世紀初頭満洲地域社会の変容：高麗溝事件に見る満洲の陸と海」『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』26、2018年は嘉慶年間に渤海を挟んで成立していた人的ネットワークと経済活動の活発化を議論している。

(64)「一、我族自明洪武遷莒歴三百年、及我本朝又百余年矣。……。今査閲旧譜、其已重名者改之、其新命名者、皆検点使無誤、庶称謂可以無嫌焉。」「荘氏族譜凡例」（乾隆年間？）、『荘氏族譜』（1910年刊行）所収。

(65)「一、……。十世以上、不敢妄為更張、擬自十一世起、如十一世為懋某、則十二世為肇某、下倣此総以双字命名。上字用所定之字、下字可任便。……」「荘氏族譜凡例」（乾隆年間？）、『荘氏族譜』（1910年刊行）所収。

(66)荘詠「重修家譜敘」（嘉慶8年、1803年）、『荘氏族譜』（1910年刊行）所収。

(67)「拠称伊已故堂叔荘詠、前在直隷滄州任内虧欠銀両。経伊堂叔荘詡、具報家産尽絶、其実荘詠及伊嗣子荘懋濂等、共有屯田一万三千余畝、生息字号十余処。所報朦朧捏飾。伊勧令荘詡首挙。反被率領子姪多人。将伊殴傷。……。」『清実録』道光6年（1826年）正月己亥條。もっとも荘均一自身も告発に当たって官印を不正利用した罪で咎められた。本件は荘均一の不法行為を摘発した一件に附随して採録された。まお大店鎮に語り継がれる伝承を収集した王悦振・王占魁主編『大店的伝説』山東省臨沂地区民間文学集成辦公室、1991年、149-154頁は、荘均一ではなく弟の荘沁一の物語として採録している。これが伝承の誤りか、或いは語り手、書き手どちらかの間違いかは判断できない。

(68)「大店是莒南県最大的封建堡塁、地主集中、土地集中、楼院相聯、共七十二箇地主堂号、為明清両代大地主。土地号称四百八十頃、以双柳堂及知松堂各百二十頃為最多、擁有六七十箇荘子、分佈于方圓百余里、

是一帯封建勢力之権威。」莒南県委「大店査減闘争総結」『闘争生活』増刊、1944 年 10 月（山東省檔案館・山東社会科学院歴史研究所編『山東革命歴史檔案資料選編』第 13 輯、山東人民出版社、1983 年所収）、97 頁。

(69)荘虔玉「拠初歩調査、大店荘氏不止七十二箇堂号、現在已知道的就有一百五十多箇堂号。」荘虔玉「大店荘氏堂号考略」『莒南文史資料』3、1993 年。

本稿は科研費基盤研究（C)）20K01000「華北宗族の解体と台湾分支形成そして再融合：20 世紀後半僑郷山東を巡るネットワーク」の成果の一部である。